



No. 144 《志野茶碗》桃山時代(16世紀末) 美濃 M792





No. 7 《瓦經》平安時代(12世紀) 產地不詳(東播系諸窯[兵庫県南東部]か) M985



No. 6 《經筒外容器》平安時代(12世紀) 渥美 M994



No. 12 《鉄絵草文沓茶碗(絵唐津)》桃山時代-江戸時代(16世紀末-17世紀初めか) 唐津 M1452



No. 20 《鉄絵渦文茶碗(絵唐津)》江戸時代(17世紀初め) 唐津 M582



No. 19 《鉄絵草文壺(絵唐津)》桃山時代-江戸時代(16世紀末-17世紀初め) 唐津 M1392



No. 30 《色絵花亀甲文角瓶》江戸時代(18世紀前半) 有田 M1624



No. 42 《白磁栗置物》江戸時代(19世紀) 三川内 M1669



No. 53 《白薩摩銀杏文巾筒》江戸時代(19世紀) 薩摩 M1583



No. 57 《灰釉割高台茶碗》江戸時代(17世紀) 萩 M578



No. 59 《白釉茶碗》江戸時代(17世紀) 萩か M784



No. 63 《茶器 銘 著露軒》桃山時代(16世紀) 備前 M1419





No. 77 《黒楽茶碗 銘 苔清水》桃山時代(16世紀後半) 楽長次郎 楽窯 M820



No. 89 《白釉鍬形掛花入》江戸時代(17世紀後半) 野々村仁清 京都・御室窯 M1274



No. 98 《白泥三峰炉》江戸時代(19世紀) 青木木米 京都 M1563



No. 130 《焼締肩衝茶入 銘 無一物》桃山時代(17世紀初頭) 信楽 M1418



No. 134 《信楽矢筈口三足水指》桃山時代(17世紀初頭) 信楽 M1200



No. 151 《黒織部茶碗 銘 菱餅》桃山時代(17世紀初) 美濃 M546



No. 164 《織部平向付》桃山時代(17世紀初) 美濃 M1479



No. 172 《鉄釉肩衝茶入 銘 八重垣》江戸時代(17世紀前半) 瀬戸 M1416



No. 174 《鵲斑釉手付鉢》江戸時代(19世紀前半) 加藤春岱 瀬戸 M1350



No. 179 《染付祥瑞文薄端花器》江戸時代(19世紀前半) 瀬戸 M1260

木村定三コレクション日本陶磁目録 I

凡例

- ・本目録は、愛知県美術館所蔵「木村定三コレクション」の中から日本古代～近世までの陶磁を掲載し、解説を付したものである。
- ・各作品名は、調査者の見解を勘案して決定した。銘については、木村定三コレクションに加わる前に付けられたものと、木村定三コレクションに加わった後に付けられたものがあり、主に前者を作品名とともに表記した。
- ・各作品のデータは、掲載番号、作品名、作者名、制作年代、員数、寸法(cm)、産地、コレクション番号、受入時名称の順に掲載した。
- ・掲載は、制作年代が近世(桃山時代)より前のものは年代順とし、近世以降のものは別とした。
- ・作品解説は、荒川正明氏(学習院大学教授)、岡佳子氏(大手前大学史学研究所客員研究員)、梶山博史氏(中之島香雪美術館学芸課長)、鈴田由紀夫氏(佐賀県立九州陶磁文化館館長)、仲野泰裕氏(陶磁文化研究家・元愛知県陶磁美術館副館長)が執筆し、解説末尾に姓のみを記した。
- ・箱書等は、作品と共のもの、あるいは木村定三による銘に関わるものを、解説内または末尾に記した。箱書等で判読できなかった文字は□の記号で示し、改行は／で示した。
- ・荒川氏による調査は2008年度に行われ、鯨井秀伸¹が補助した。岡氏による調査は2011年度と2022年度に行われ、2011年度の調査は鯨井秀伸、村瀬可奈¹が、2022年度の調査は中野悠²が補助した。梶山氏による調査は2017年度に行われ、平瀬礼太²、中野悠が補助した。鈴田氏による調査は2016年度に行われ、平瀬礼太、榎名彩香²、中野悠が補助した。仲野氏による調査は2005年度より始まり、鯨井秀伸、長屋菜津子¹、中野悠、平瀬礼太が補助し、また、加藤里恵氏¹、高木久子の調査補助を受けた。
- ・日本陶磁の調査は2005(平成17)年度に始まり、一時調査は古田浩俊²、鯨井秀伸が担当したのち、長屋菜津子、平瀬礼太、中野悠が引き継ぎを行いながら担当した。上記調査以外にも、井上喜久男氏³、大西遼氏⁴、小川裕紀氏⁴、神崎かず子氏³、佐藤一信氏⁴、柏木知子氏(兵庫県立美術館)、服部文孝氏(瀬戸市美術館館長)、林屋晴三氏、前田博氏、山内香穂氏(瀬戸市美術館)の協力を得、加藤里恵氏、高木久子の調査補助を受けた。
- ・本目録に先行するものとして、愛知県陶磁美術館学芸部学芸課編『茶陶 木村コレクション』(愛知県美術館、2006年)、『文人趣味と煎茶 木村定三コレクション』(愛知県美術館、2018年)などの刊行物が既にあり、一部の調査結果も本目録に反映されている。

1 調査時に愛知県美術館に在籍

2 愛知県美術館学芸員

3 調査時に愛知県陶磁美術館に在籍

4 愛知県陶磁美術館学芸員



1. 方形三尊埴仏^{ほうけいさんぞんせんぶつ}

飛鳥時代(白鳳期、7世紀)

1 軀

縦23.4、横18.9、厚さ3.0

産地不詳

M1016(方形三尊埴仏)

土製無釉で型押成形された方形の埴仏。数片を接合修復されている。橘寺(奈良県明日香村橘)出土と伝えられ、奈良国立博物館所蔵資料(考52)などと共通する特徴が認められる。いずれも三尊の顔が剥落している例が多い。(仲野)



2. 小瓶^{しょうへい}

平安時代(9世紀)

1 口

高9.9、口径4.2、胴径5.8、底径3.9

産地不詳(陶邑地区、篠地区)

M2928(須恵器壺)

口頸部の開く小形の瓶。小品であるが、轆轤技術は高く、僅かに自然釉が認められる。底部は糸切のままで無高台。焼かれたのは陶邑(大阪府泉北丘陵)から篠地区(京都府亀岡市)に及ぶやや広い地域が想定される。(仲野)



3. 猿面硯^{えんめんげん}

制作年代不詳

1 面

高3.3、縦19.7、横11.3

産地不詳

M2355(猿面硯)

裏面の格子状の当目文様から古代の平瓦の一部が硯として利用されたことが分かる。格子目は朝鮮の瓦の可能性も含まれるが、当該資料では日本製と考えられる。蒔絵を施し硯として完成されたのは、明治時代から昭和初期とされる。(『愛知県美術館 研究紀要 第22号 木村定三コレクション編』2015 掲載番号28)(仲野)



4. 猿面硯^{えんめんけん}

制作年代不詳

1面

高3.7、縦13.5、横9.5

産地不詳(東海を除く地域)

M2356(猿面硯)

須恵器の甕状の器種の胴部の一部の内面を表にして硯として利用している。墨池、墨堂などの明確な区分は無いが、甕の内面の緩やかな傾斜を利用している。表面には、青海波状の当具の痕跡が認められ、裏面には叩き目が認められる。東海地方の須恵器にはこのような成形痕は認められない。部分的な陶片の利用のため、年代の推定は難しいが、古墳時代から平安時代までの幅が考えられる。蒔絵を施し硯として完成されたのは、昭和時代初期とされる。(『愛知県美術館 研究紀要 第22号 木村定三コレクション編』2015 掲載番号29)(仲野)



5. 西寺文字敷瓦^{さいじもじしがわら}

制作年代不詳(13世紀)

1枚

高4.0、縦24.2、幅24.6

産地不詳

M1242(西寺時代敷瓦)

無釉瓦質ではあるが硬く焼き締まった敷瓦。暗褐色で重厚な仕上がりで重い。表面中央に「西寺」の陽刻が認められるが一部剥落している。表面の各辺端部から下面へ斜めに面取されている。西寺(京都市南区唐橋)は、東寺と共に創建されたが、1233年焼失以降廃寺。(仲野)



6. 経筒外容器^{きょうづつがいようき}

平安時代(12世紀)

1合

総高36.0、身高31.6、口径15.0、胴径18.6、底径17.0

渥美

M994(経筒外容器)

蓋を伴う陶製焼締め経筒外容器。体部は巾広い粘土紐による輪積成形の後、丁寧な器面調整がされており一部に自然釉が認められる。蓋は内面が僅かに窪み、筒本体の上部が上手く収まっているが、筒に受けなどの細工は認められない。全体にやや黒ずみ堅く焼き締まっている。山城國花背経塚群(京都市左京区花背別所町)出土と伝える。(仲野)





7. 瓦^{がきょう}経

平安時代(12世紀)

1枚

縦22.8、横18.5、厚さ(最大)1.85

産地不詳(東播系諸窯[兵庫県南東部]か)

M985(瓦経)

丁寧な器面調整の後、整然と楷書で経文が彫られた瓦経。経文だけでなく、土質、乾燥状況など熟知した専門的な技量が認められる。表・裏両面では、焼成状況に差が認められる。八二の丁付が刻まれており、巻八の二丁目に当たることが分かる。奥書永久二(1114)年の「法華経」の一部と考えられる。福岡市飯盛山経塚(福岡市西区飯盛)出土例が知られる。(仲野)

8. 山茶^{やまぢゃわん}碗

平安時代末-鎌倉時代初期(12世紀末-13世紀初期)

1口

高6.3、口径13.7×16.8、底径7.1-7.3

常滑

M818(行基焼平茶碗 編笠形 銘一文字)

全面に自然釉の掛かった碗。かなり大粒の石をかんてい、底部には雑な付高台が認められる。見込み中央部には降灰が認められず、重ね焼きされたことが分かる。口縁部に歪みがある他、保存状況は比較的良好であり、窯跡に遺棄され埋没していたものと考えられる。口縁の一部に金直しを施し、平茶碗とされた。(仲野)

箱蓋裏「行基ヤキ／平茶盃／銘一文字／七十七翁／春泰証(白文円印「春泰」)

風呂敷「行基焼／編笠茶盃／「一文字」」

9. 壺^{つぼ}

室町時代(14世紀)

1口

高25.1、口径13.4、胴径21.4、底径14.7

備前

M1710(備前壺)

全面に自然釉の掛かった小形の壺。張りのある肩部にやや開き気味で口縁部に達する頸部が続く。口縁部は、上端を折り返し玉縁に近い状態である。火表に自然釉が厚く掛かっているが、全体には暗褐色である。底部は平底。緻密な胎土だが砂粒を含み、石はぜも認められる。(仲野)



10. 灰釉片口茶碗 銘 萬歳亀

桃山時代-江戸時代(16世紀末-17世紀初め)

1口

高7.3、口径11.2×14.5、底径6.0×6.4

唐津

M802(唐津片口茶碗 銘 萬歳亀)

口縁部に小穴を開け、注ぎ口を付けた片口。本来酒や醤油等の液体を取り分けるための容器であるが、口径が十数センチであるため茶碗に見立てられたと考えられる。口部は玉縁に作られ、側面に熔着痕があるため焼成時に歪み杓形となっている。高台は荒く削られ、外面と内面の中心がずれている為、いわゆる三日月高台となっている。(鈴田)

箱蓋覆紙墨書「唐津 片口茶盃／銘／萬歳亀」

箱蓋裏墨書「銘／萬歳亀／守一記」

風呂敷墨書「唐津／片口茶盃／萬歳亀」



11. 灰釉沓茶碗

桃山時代-江戸時代(16世紀末-17世紀初めか)

1口

高6.3、口径10.3×13.1、底径6.8×7.0

唐津

M814(唐津茶碗)

鉢状の胴部を3ヶ所窪ませ州浜形の沓茶碗に仕上げています。高台と周辺以外の内外に掛けられた釉薬は美しい枇杷色に発色しています。外面の所々に見られる釉の濃いところは白濁しており、長石質の釉調と考えられる。高台は幅広に作られ、畳付きには糸切りのような筋目が見られる。奥高麗の碗形は熊川(こもがわい)形や井戸形の茶碗を基準とするが、枇杷色の釉調による呼び方もあり、この茶碗も広義の奥高麗ふうであるが杓形は特異である。(鈴田)



12. 鉄絵草文沓茶碗(絵唐津)

桃山時代-江戸時代(16世紀末-17世紀初めか)

1口

高8.4、口径11.4×17.5、底径6.2

唐津

M1452(絵唐津沓鉢(菓子入・果物入))

ロクロ成形で碗を挽き、杓形に変形させている。胴部は2段の窪みがあり、鉄絵の具で抽象的な草文風の文様が両面に描かれている。口縁部は鉄絵の具で塗られ、皮鯨としている。高台は外側は回転して削るが、内部は縦横に彫っている。また高台周囲は回転して削ったあと線状に彫り文を入れている。胎土は比較的鉄分を含み茶色に発色している。灰釉系の釉薬は焼成の具合によって青みを帯びた部分と底部などやや赤みを帯びた部分がある。(鈴田)



てつえみずさし えからつ めい ほてい
13. 鉄絵水指(絵唐津) 銘 布袋

桃山時代-江戸時代(16世紀末-17世紀初め)

1口

高10.9×12.5、口径8.5×14.4、胴径14.1×15.5、
底径8.5×9.0

唐津

M1407(絵唐津香物鉢(水指) 銘 布袋)

ロクロ成形で筒形の器を挽き、口縁部を歪みに変形させている。口縁部には鉄絵の具が塗られ、皮鯨の様式となっている。胎土は鉄分を多く含み褐色であり、無釉部は僅かに光沢がある。底部は糸切りのあと中心部を浅く削り、畳付の周辺も僅かに削って高台を作っている。釉薬は長石質のやや白濁した釉調であり、胎土が褐色のわりに白く見える。内面も全体に施釉されている。(鈴田)

風呂敷墨書「鉢／画唐津／銘／布袋」



てつえむこうづけ えからつ めい なるこ
14. 鉄絵向付(絵唐津) 銘 鳴子

桃山時代-江戸時代(16世紀末-17世紀初め)

1口

高5.5、口径12.0×13.9、底径4.8

唐津

M589(絵唐津平茶碗 銘 鳴子)

口部を溝縁に作り周囲を押さえて変形にしている。見込みと周囲には太い線文を鉄絵の具で施す。透明の灰釉は薄く掛けられ、高台と周囲は広めに掛け残されている。口縁の外側一部には他の製品の熔着痕が見られ、口部の意図的な変形とは別に凹んでいる。見込みには3個の胎土目が見られる。素地は砂粒を含み、高台内の削りは縮緬状になっている。(鈴田)

風呂敷墨書「鳴子／桃山時代／絵唐津／平茶鉢／満岡誌」





てつえおもだちどりもんむこうづけ えからつ
15. 鉄絵沢瀉千鳥文向付(絵唐津)

桃山時代-江戸時代(16世紀末-17世紀初め)

5客

高6.7、口径11.3、底径4.3

唐津

M1472(絵唐津四方向付)

底部を丸く作り、口部を隅入りの四方に形作る。見込みには鉄絵の具で沢瀉文、周囲に千鳥文を描く。絵の具は黒く発色し、文様が鮮明に現れている。口縁部にも鉄絵の具が塗られており、変形の輪郭が際立つ。釉薬は薄いところは透明であるが、溜まりは白濁している。胎土は鉄分を多く含み、褐色がかっている。高台は細く削られているが、器の中心からずれたものもある。高台内には削りによる縮緬が見られる。また高台脇に施釉時の指跡が残っている器もある。(鈴田)



てつえそうもんむこうづけ えからつ
16. 鉄絵草文向付(絵唐津)

桃山時代-江戸時代(16世紀末-17世紀初め)

5客

高4.2、口径13.5-14.2、底径4.5

唐津

M1522(絵唐津六角平向付 5客)

見込みを深めに作り、口縁部は幅広にし6角に変形させている。磁器製品であれば型打ちで変形皿を作るが、唐津焼は手わざで変形させる。5客のうち4客は6角形をなすが、2客は緩やかな4角形である。高台は中心がぶれずに丁寧に削られている。見込みには鉄絵の具で草文が描かれ、口縁部は4方から6方に鉄絵で区画している。また見込みに3個から4個の胎土目が見られるが、無いものもある。釉薬は薄く掛けられているが、溜まりの部分は白濁している。(鈴田)



かいゆうてつえはい かわくじら めい こおもて
17. 灰釉鉄絵盃(皮鯨) 銘 小面

桃山時代-江戸時代(16世紀末-17世紀初め)

1口

高4.1、口径9.3×10.7、底径3.7×3.9

唐津

M1651(唐津皮鯨酒盃 銘 小面)

口縁を鉄絵の具で塗り皮鯨にしている。胎土は比較的細かい粒子であり、削り出した高台内には兜巾と縮緬が生じている。畳付きは高台の削りが外側と内面では中心がずれているため、いわゆる三日月高台となっている。裏側には熔着痕があり、他の製品との接触により歪んでいる。釉薬は白濁きみであり、細かな貫入が入っている。口径が10cmほどであるため本来は皿として作られたものであるが、箱表には「唐津 皮鯨酒吞」と墨書されている。(鈴田)

箱蓋裏墨書「唐津皮鯨酒吞／銘 小面／守一題」

風呂敷墨書「守一箱／唐津酒盃／小面」



かいゆうてつえはい かいくじら めい そてつ
18. 灰釉鉄絵盃(皮鯨) 銘 蘇鉄

桃山時代-江戸時代(16世紀末-17世紀初め)

1口

高5.3、口径6.3×7.4、底径3.5

唐津

M1657(唐津皮鯨酒盃 銘 蘇鉄)

口部に鉄絵の具を塗り皮鯨としている。口縁の一部を窪ませ沓茶碗のような変化を付けている。胎土は荒目であり、削りの部分には細かな凹凸が現れている。高台作りは幅広に削られ、高台内の削りは浅い。灰釉系の釉薬は厚めに掛けられ、全体に熔けきっていないため白濁している。木箱蓋表に「唐津 皮鯨酒盃」、蓋裏に「銘 蘇鉄・・」の墨書がある。(鈴田)



てつえそうもんつぼ えからつ
19. 鉄絵草文壺(絵唐津)

桃山時代-江戸時代(16世紀末-17世紀初め)

1口

高10.7-11.3、口径8.9、胴径14.5、底径8.0-8.2

唐津

M1392(絵唐津塩筒小鉢(火入れ))

胴部が算盤形に膨らんだ器形であり、胴に草文らしき文様や手長猿にも見える文様が鉄絵の具で描かれている。草文の下部には熔着痕がある。反対側にも草文らしき文様がある。黒色がかった鉄絵は通常の鉄絵より少し盛り上がり、釉薬に近い黒である。重要文化財の絵唐津菖蒲文茶碗の鉄絵に似ている。内面も施釉され、口部と内底に鉄絵の具が落ちた斑点がある。無釉の高台は竹節に荒く削り出されている。畳付きや高台脇は赤茶色に焼けている。(鈴田)



てつえうずもんちゃわん えからつ
20. 鉄絵渦文茶碗(絵唐津)

江戸時代(17世紀初め)

1口

高7.5、口径10.5-12.5、底径4.5-4.7

唐津

M582(絵唐津茶碗)

鉄絵の具で外面には渦文、内面には蔓状の草文が描かれている。透明性の灰釉は薄く掛けられ、素地の中の砂粒による凹凸が現れている。外面の釉溜まりは灰緑色を呈する。見込みには兜巾が見られる。縁にも鉄絵が施され、皮鯨の様式となっている。高台は節状に削り出され、砂目痕がある。高台内は滑らかに湾曲している。外面足部の無釉部には細かなロクロ目が残る。(鈴田)



かいゆうちゃわん せとからつ めいしらたま
21. 灰釉茶碗(瀬戸唐津) 銘 白珠

江戸時代(17世紀前半)

1口

高6.4、口径15.6、底径5.0

唐津

M803(瀬戸唐津茶碗 銘 白珠)

筒形の高台脇に段を設け、そこから直線的に開いた朝顔形の茶碗。見込みに目跡が3つある。高台内は縮緬状の削りが見られる。砂粒を含む胎土は荒いが白く、長石質の半透明の白釉が掛けられている。釉の全面には細かな小穴を生じている。口部には鉄釉が施されており、天目茶碗の覆輪のように見える。瀬戸唐津は碗形の本手と、この茶碗のような皮鯨手に分けられている。瀬戸風の唐津焼の意味とされるが、生産窯は特定されていない。(鈴田)

箱蓋覆紙墨書「瀬戸唐津茶碗／銘／白珠」

箱蓋裏墨書「瀬戸唐津／茶鉢／白珠と号ス／守一記」

風呂敷墨書「瀬戸唐津／茶鉢／白珠」



22. 呼継茶碗 銘 三国

制作年代不詳

2口

(A)高5.1、口径13.0-13.5、高台径3.7

(B)高4.6、口径13.2、高台径4.1

唐津

M580(呼続重茶碗 銘 三国)

- A 見込に釉禿が有り、藁灰釉の流れる口縁部が呼継されている。高台は浅く削り出されている。
- B 見込み四点の胎土目跡が認められ、口縁部が呼継されている。腰部に目土を外した跡が認められ、碁笥底である。両者共に接合部分の表裏に青海波文と牡丹文の蒔絵が巡らされている。唐津としては最も古いタイプと考えられるが、口縁部と同固体か確認できなかったため、年代は未詳とした。碌々斎が「三国」と銘を付けており、呼継・蒔絵の時期は幕末・明治前期と考えられる。

箱(曲げ物)蓋裏墨書「西脇清風軒唐津重／茶碗補於八代典朝鮮／焼以自愛之□有故傳／金生堂□清宗銘因号三国／碌々斎(花押)」(仲野)



23. 藁灰釉香炉 (斑唐津)

江戸時代(17世紀)

1基

高6.3(蓋まで7.5)、口径5.3×5.4、胴径7.5、

底径5.0×5.3

唐津

M1525(朝鮮唐津香炉)

胴部を2段に窪ませ、口部を平縁の姥口に作る。藁灰釉を掛けるが、濃い部分は斑に、薄い部分は透明となっている。釉には細かな貫入が見られる。高台内は無釉。底部は3方をヘラ削りでアーチ状の3足としている。足部は幅広に削られている。胎土は赤褐色で硬く焼きしめる。萩文透彫りの精巧な金工蓋が付く。(鈴田)



いろえじゆちようもんはちかくきら
24. 色絵樹鳥文八角皿

江戸時代(17世紀中葉)

5客

高2.5-2.8、口径14.1×15.0、底径8.7

有田

M1458(古九谷八角皿 日の出渡鷹)

型打ちにより八角に成形され、染付と上絵により絵付けされた初期の色絵作品。口縁部には鉄錆が施され、周辺に染付で櫛歯文と雲割りに区画した四方禪文を描く。櫛歯文は高台側面に描かれるものが多いが、この年代には表側にも用いられている。見込みには古木に止まる鳥を描いている。裏面の高台周囲には上絵の花文を中心とした染付唐草文を二箇所配している。高台内には二重枠の福字銘を染付で記している。(鈴田)



そめつきたいがたござら
25. 染付鯛形小皿

江戸時代(17世紀中葉)

5客

高2.6、口径13.5×16.5、底径8.5

有田

M1459(九谷染付鯛小皿)

魚を象った変形皿で型打ち成形による。ロクロで皿を作り、生乾きの時魚形の素焼型に被せて形を整え、高台は回転して削り出すため円形となる。皿の縁にはM1458と同じく鉄錆が施されている。目や頭部が大きく描かれているため、幼魚に見える。鱗は一枚一枚丁寧に表され、鱗も何本もの細い線で描かれている。裏面には高台周囲に唐花唐草文が廻っている。高台内には「大明成化年製」と記され、中国磁器を模倣したことが伺える。(鈴田)



いろえさくらうめもんはち
26. 色絵桜梅文鉢

江戸時代(17世紀末-18世紀前半)

1口

高7.7、口径15.8、底径7.8

有田

M1346(古伊万里錦手鉢)

M1355(目録27)より少し小ぶりであるが制作年代や表現が類似する古伊万里金襴手の作品である。金彩がかなり剥落しているが、口縁には金彩が残っており、胴部には染付で描かれた樹木の上に金彩の線描きが施されている。口縁部には連続した梅文が描かれているが、桃文と見られる染付文が間に配置されている。高台側面には染付の×文と菱文が交互に描かれている。M1355の鉢にも高台側面に同様の○×文が見られる。(鈴田)



いろえうめつばきもんりんかほち
27. 色絵梅椿文輪花鉢

江戸時代(17世紀末-18世紀前半)

1口

高10.0、口径21.4-21.8、底径10.7

有田

M1355(古伊万里錦手輪手鉢)

型打ち成形により口部を輪花にしている。この口縁部にはほとんど剥落しているが金彩が施されている。外面には染付で幹を描き、上絵で椿の花や葉文を描いている。染付に上絵の金、赤を組み合わせた色調は古伊万里金欄手様式の基本配色であるが、この鉢は黄と二種類の緑を加えたより豊かな装飾である。口縁部には松竹梅を繋いだ文様を巡らしている。松竹梅を繋いだこの連続文はこの年代に流行している。(鈴田)



はくじちやく
28. 白磁猪口

江戸時代(17世紀末-18世紀前半)

1口

高5.7×5.9、口径7.6×7.8、底径4.1

有田

M1412(古伊万里白磁茶器 牙蓋)

失透ぎみの釉薬が掛かった白磁猪口。腰部に段を設け、胴部は直線的に開きながら立ち上がる。この器形は17世紀末に現れ、18世紀前半に多く見られる。段を作らず高台から直線的に立ち上がるタイプの器形も同時代に作られている。本来は猪口であるが、牙蓋が付けられ茶入れに見立てて使用された。(鈴田)





いろえぼたんからくきもんはち
29. 色絵牡丹唐草文鉢

江戸時代(18世紀前半)

1口

高9.2-9.7、口径18.2×18.7、底径7.2

有田

M1339 (伊万里錦手牡丹絵鉢)

鉢の内外に色絵で牡丹唐草文を描く。染付で藍色に描かれた葉文の部分には金彩で葉脈を表し、金の光沢が鮮明である。口縁部にも金彩が施されている。器の口縁部を金で彩るのは18世紀半ばから後半に流行している。また葉の先端に緑と紫の小さな葉文が描かれているが、輪郭線に赤が用いられており、この表現も同時代によく見られる。高台内には染付で渦状の福字銘が記されているが、丸みを帯びた二重枠線は希少である。(鈴田)



いろえはなきっこうもんかくびん
30. 色絵花亀甲文角瓶

江戸時代(18世紀前半)

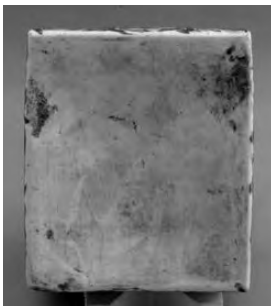
1口

高17.5×19.2、口径2.6、胴径10.7×9.2、底径9.0×10.2

有田

M1624 (古伊万里亀甲文三彩角酒瓶)

板状の粘土を貼り合わせて成形した角瓶。底部は無釉。上面には松の陽刻文が貼り付けられている。絵付けはすべて上絵により、赤、緑、紫、青で彩色されている。18世紀の角瓶は国内向け、海外向けにおいて各種みられ、需要の多さを物語っている。用途は酒次と考えられる。注口は角形は少なく、ほとんどロクロ成形の丸い注ぎ口である。角瓶のサイズは径が10cm程度、高さが20cm程度のものが多い。(鈴田)





いろえはなもんろっかくちやいれ
31. 色絵花文六角茶入

江戸時代(18世紀前半-中葉)

1口

高8.9、口径3.9×5.2、底径5.3×6.4

有田

M1411(古九谷六角茶器 花籠画 牙蓋)

六角形の面作りであり、底部が広く口部がすぼまっている。無釉の底部は内面と外面ともに布目が付いている。内部は無釉であり、内側部の六面は指で横に撫でて繫いだような跡が見られる。口部上面には赤の線描きで梅花が描かれ、花卉に金彩のような色が残っている。胴部には草花文が色絵で描かれ、他面には紫の花器状のものに緑の葉を活けた文様が配されている。(鈴田)



いろえきくもんかさもちふじんぞう
32. 色絵菊文笠持婦人像

江戸時代(18世紀中葉)

1躯

高39.6、胴径14.0×14.7、底径11.2×11.4

有田

M1610(古伊万里笠持美人立像)

古伊万里人形と通称される18世紀の輸出品。絵付けは染付に上絵の赤と金の特徴とする。内部は空洞であり、型押し成形による。土型と呼ばれる素焼きの型に粘土を押し付け、型を合わせて成形するため接ぎ目を伴う。この作品は胴部の両側部に接ぎ跡が見られる。頭や傘など突起したものは別に型で作り、接合する。中は空洞であるため焼成のためには空気抜きが必要であり、底部と袖に小穴がある。無釉の平底には布目が見られる。(鈴田)



いろえきくもんちやく
33. 色絵菊文猪口

江戸時代(18世紀後半)

5客

高7.1、口径10.3、底径8.0(高台部分3.0)

有田

M1668(伊万里錦手菊図猪口 5個)

染付と上絵による菊文金襴手の猪口。平均的なそば猪口よりやや大きい。口縁内側に染付で四方櫛文、見込みに菊文を描く。口縁部には金彩が残る。筒形の器形は僅かに口が開く。そば猪口は一般的に初期ほど口部が広がり、後期ほど筒形になる。底は平たく蛇ノ目凹型高台。この高台も猪口では18世紀半ばに現れ、その後そば猪口の高台作りの主流となる。(鈴田)



そめつけあぼしまつもんすいぢきう
34. 染付網干松文水注

江戸時代(18世紀)

1口

高 取手まで19.6、口まで10.8、口径11.1、
胴径15.7×20.4、底径10.3、(蓋)高2.6、径10.7

有田

M1405(伊万里 州浜・松・干網・千鳥図付銚子)

染付で松文を中央に描き、遠景に網干文を配している。把手上面や注ぎ口側面にも松文を描く。反対面には網干文がなく松文のみである。右側に主文様を描く傾向は古伊万里では一般的であり、右手で注ぐ時に相手側に面する側が見える配慮のためと考えられる。名称は水注としたが用途は酒次であろう。把手は胴部に貼り付けられているが、接合部に円盤状の粘土を張り付け補強している。(鈴田)



いろえききょうとうじんもんほそくびびん
35. 色絵桔梗唐人文細首瓶

江戸時代(18世紀)

1口

高31.3、口径4.3、胴径20.0、底径10.5×10.6

有田

M1677(古伊万里酒壺 木製栓付)

胴部に桔梗文を施すが、赤い線描きの表現と瓶の胴部の膨らみの特徴から18世紀の制作とみられる。M1263色絵和歌文細首瓶の形態と比べてこの瓶の胴部は丸みを帯び、年代的にその後の時代であると考えられる。底部には本焼きの窯傷ヒビを上絵で補修しており、後代にさらに漆で補修している。胴部の桔梗文は同時代のそば猪口などにも見られる。反対面には赤線に緑彩の唐人文を描き、桔梗文と唐人文の間には蝶文を一羽ずつ配している。(鈴田)





36. 色絵龍宮文大皿

江戸時代(19世紀)

1枚

高5.2、口径40.8、底径23.6

有田

M1717(古伊万里龍宮城大皿)

口径40cmを超える大皿であり、高台内には4つの針支え痕がある。縁には金彩が施されている。全面に中心から周囲に広がる精緻な網目文が染付で描かれ、上絵で龍宮の文様を加えている。画面下方から蟹気楼が広がり、中に龍宮城と雲気文が描かれている。蟹気楼の外側には魚、蛤、巻貝、海藻の文様が網目に絡むように表されている。裏面高台周囲にも染付で網目文が描かれ、上絵で飛雲文が散らされている。(鈴田)

37. 染付和歌文細首瓶

江戸時代(17世紀後半-18世紀前半)

1口

高29.0、口径3.6、胴径16.3、底径9.2

肥前

M1263(古伊万里染付和歌文徳利)

白磁胎に染付で和歌が記されている。首部は細く作られているが、細首の瓶は17世紀から継続して生産されている。酒や醤油などを貯蔵し、注ぐ用途と推測される。年代によって器形の変化が見られ、時代が下るほど口部が肥大する傾向がある。この瓶は口縁部が薄く、全体の形態と合わせて17世紀後半から18世紀前半の制作年代と考えられる。和歌は新古今和歌集にある紫式部の「めぐり逢ひて見しやそれとも分かぬ間に雲隠れにし夜半の月影」を記したものであろう。(鈴田)

38. 染付丸文碗

江戸時代(18世紀後半)

1口

高6.1、口径11.4×11.6、底径4.5×4.6

肥前系

M778(古伊万里茶碗 くわらんか 丸菱文様)

M800、M831と共通する厚手の碗であり、いわゆるくわらんか碗と通称される。外面に丸文と菱文を交互に描いている。藍色に発色するコバルトの含有が少ないため染付の色は薄く、鉄分により部分的には茶色に見える。見込みにはコンニャク印判による五弁花文が施されている。この種の碗は波佐見窯で多く生産されている。(鈴田)



39. 染付雪輪梅文碗 銘 朝露

江戸時代(18世紀後半)

2客

(小)高5.0-5.1、口径9.0、底径3.7

(大)高7.5、口径12.5、底径4.8×5.0

肥前

M800(染付草花文茶碗 銘 朝露)

丸みを帯びた器形で厚手に作られ、側面には雪輪と梅花文などが染付で描かれている。素地は灰色がかり、染付の色も暗い色調である。こうした特徴をもつ碗はくらわんか碗と呼ばれている。大村藩の波佐見窯を中心に生産され、大衆的な実用品として18世紀から19世紀に全国に流通した。量産品であるため文様は簡略化され、オリジナルの文様が分かりにくい、その分伸びやかで自由な味わいがある。(鈴田)

箱蓋覆紙墨書「古伊万里／染付茶盃／銘／朝露」

箱蓋裏墨書「染付茶盃／銘／朝露／守一記」

風呂敷墨書「大小二個／古伊万里／染付茶盃／朝露」



40. 染付菊文碗

江戸時代(18世紀)

2客

(小)高5.1-5.2、口径10.2×10.6、底径4.5

(大)高5.8、口径11.2、底径4.3

肥前

M831(染付菊花文茶碗)

M800の碗と同様に厚手の碗であり、くらわんか碗と呼ばれる。釉薬の掛かっていない高台の一部を見ると、薄茶色であり鉄分の多い素地であることが分かる。したがって釉薬の掛かった部分は灰色に発色している。染付の菊文はスタンプの一種であるコンニャク印判によるものであり、くらわんか碗にはよく用いられている。菊文の隣に描かれている井桁文は手描きであり、印判と手描きを組み合わせている。内面にも小さな葉文状のコンニャク印判が見られる。小碗の方は菊花文のみをコンニャク印判で施している。見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎされ、重ね積みした痕がある。(鈴田)



41. 染付梅花氷裂文水指

江戸時代(19世紀)

1口

高12.6、口径22.1、底径11.8×12.0

肥前系

M1192(古伊万里染付氷梅図水指)

やや灰色がかった素地に染付で梅花文と氷裂文が描かれている。氷裂文は筆致を生かした闊達な線描であり、間に散らされた梅花文も淡い面塗りの独特の表現である。技術的には肥前の系譜に入るが、産地は肥前以外の磁器窯と考えられる。(鈴田)



はくじくりおきもの 42. 白磁栗置物

江戸時代(19世紀)

1個

高10.5、幅11.5、奥行10.7

三川内

M1669(平戸焼栗飾物)

イガに囲まれた中に3個の栗が納められている。イガの殻は3枚の葉で包まれ、2枚の葉先と、裏でまとめられた葉柄で全体を支えている。底部に4ヶ所の無釉部があり、熔着痕が見られる。イガの先端部は無釉であり、胎土の鉄分により薄茶色となって白磁の色調に変化を付けている。葉には線彫りで葉脈が表され、釉溜まりにより線が見えている。(鈴田)



はくじきんぎょおきもの 43. 白磁金魚置物

江戸時代(19世紀)

1個

高3.7、腹ひれと腹ひれの間4.0、口から尾ひれの間7.4

三川内

M2341(平戸焼 金魚水滴(筆架兼用))

金魚を象った白磁の愛らしい置物。型押し成形により左右対称に作られている。内面は空洞であり口と尾びれの下に小穴がある。水滴に使えないこともないが、筆架との見方もある。目には黒彩が施されている。三川内窯は細工物を得意とし、白磁の動物置物などが多く作られている。江戸期の作品では目に濃い染付の藍色を入れたものが見られるが、明治になると黒彩のものが多。 (鈴田)



そめつけさんふくじんもんちょうし 44. 染付三福神文銚子

江戸時代(19世紀)

1口

高14.6、口径4.4×2.9、最大径18.3×9.8、底径10.7×6.7

三川内

M1635(平戸焼三福人舟乗り銚子 宝袋小皿蓋)

陽刻で一面に大黒天と布袋、他面に恵比寿の文様を施す。銚子の尖った注ぎ口は船首を象り、後方が船尾となっている。胴部全体は宝袋の意匠であり、楕円形の蓋には「小判」の陽刻文字が施されている。縁起の良い宝船に七福神のうちの3神が配された目出た尽くしの酒器である。成形は押し型によるため、胴部両側に接ぎ目が見られる。陽刻で表した3福神には衣服の一部に暗色の染付が施されている。内面は無釉。(鈴田)





45. 灰釉水注 かいゆうすいぢゆう

江戸時代(17世紀前半)

1口

高8.4、口径15.1×15.2、胴径20.4、最大径24.0、底径15.0
高取

M1406(朝鮮唐津手付水指 塗蓋付)

胴部が丸く膨らみ足部が直線的に立ち上がる器形に灰緑色の釉薬が薄く掛けられている。口部は無釉であり、蓋を乗せて焼いた時の熔着痕がある。内面にも釉薬が掛かるが、素地には僅かに叩き成形時の当て木痕が見られる。底部中央には四角に5つの花びらを付けた文様が凸状に浮き出ており、釉薬は全面に施されている。底部周辺には砂等が付着している。注ぎ口は粘土板を丸めて作る。把手は無垢の粘土紐を平たく伸ばして取り付けられている。(鈴田)



46. 鉄絵草文割高台茶碗 銘 白露 てつえそうもんわりこうだいちゃわん めい しらつゆ

江戸時代(17世紀)

1口

高8.4、口径10.6×12.5、底径6.1×6.3

上野か

M547(萩鉄彩割高台茶碗 旧銘 銘 穂歌靡微風天下秋)

高台を3つ割りにし、胴部に太い草状の鉄絵を施す。透明の釉は全面に掛けられ、釉溜まりの部分は失透済みである。釉の濃淡とは別に素地の白い部分と暗い部分があり、これは化粧土の濃淡によるものと考えられる。鉄絵の部分と反対面は外から押さえて窪みが作られている。また鉄絵側の素地は縦に線状に削られ、反対側は下部が面状に削られている。高台内には中心から右回りの宛巾が見られる。重さ335g。(鈴田)

外箱覆紙墨書「絵萩／割高台／歌銘／白露／定」
「絵萩／穂頭／靡微風／天下秋／定」

内箱①蓋覆紙墨書「絵萩茶盃／穂頭靡微風／天下萩」

内箱①蓋裏墨書「穂頭靡微風／天下萩／定」

内箱②蓋表墨書「白露」

風呂敷墨書「歌銘／白露／絵萩／割高台／茶盃」



わらばいゆうくつちやわん
47. 藁灰釉沓茶碗

江戸時代(17世紀)

1口

高8.2-9.3、口径10.8×12.8、底径6.1×6.2

上野か

M564(唐津茶碗)

円筒形の高台から朝顔形に立ち上がり胴部は再び筒形になる。口部は片面を平たくして変形させている。釉薬は胴部と内面に藁灰釉を掛け、足部には透明釉を掛けている。高台脇に施釉時の指痕があり、高台内は無釉である。素地は荒く、透明釉を掛けた部分は琵琶色を呈し、素地の凹凸が目立っている。藁灰釉には細かな貫入が生じており、素地のロクロ目と相まって景色となっている。(鈴田)



はけめあさがおがたはち
48. 刷毛目朝顔形鉢

江戸時代(18世紀-19世紀)

5客

高7、口径10.8×11.3、底径5.2、重さ166g

上野か

M1477(古萩刷毛目向付)

朝顔形に開く鉢で、全面に刷毛目が施されている。胎土は黒褐色で、素地は薄く作られている。刷毛目は見込みの中心から外に向かって螺旋状に上っており、ロクロの回転は左回りである。高台内に残る刷毛目も中心から外に向かって左回転で塗られている。現川焼の可能性はあるが、類例を見出すのが困難である。(鈴田)



49. ^{りゅうくゆうからこまんそくしよくだい}緑釉唐子三足燭台

江戸時代-昭和時代(19世紀-20世紀)

1個

総高(芯立まで)17.3、高(受け皿まで)14.0、
受け皿口径7.2、胴径7.8、底径7.9

上野か

M1487(上野焼燭台)

唐子3人が上部を支える凝った意匠の燭台。輪形の台部、支えの唐子像、蠟燭立てを別々に成形し接合している。上面には鉄芯が埋め込まれている。全体に銅緑釉が掛けられているが、釉葉の薄いところは素地の色と相まって薄茶色を呈している。特に押し型成形による唐子像は凹凸が多く、細かい陽刻文が際立って見える。銅緑釉は酸化炎焼成で緑色、還元炎焼成で深紅色となるが、上部の一部に深紅色が現れている。(鈴田)



50. ^{わらばいゆうちやわん}藁灰釉茶碗

江戸時代(17世紀)

1口

高6.8、口径8.8×10.1、底径4.2×4.7

福岡か

M1145(唐津茶碗)

深めに作られた茶碗で、藁灰釉が掛けられている。口部は緩やかに楕円がかっている。高台は角が鋭く削られ、露胎の足部は段と面がくっきりしている。釉葉は藁灰の白さが鮮明ではなく、素地の鉄粉と溶け合ったような斑状になっている。内面の釉掛けも無釉の部分が見られ、また外面には施釉時の指跡があり、それらが景色となっている。(鈴田)



51. ^{そうがんとりちんみつみずさし}象嵌鳥文耳付水指

江戸時代(17世紀-18世紀)

1口

高8.3、口径12.5×12.8、胴径16.8、底径12.4×12.6

八代か

M1204(八代焼(高田焼)三島手芦雁図水指)

褐色の地全体に象嵌の技法で白い文様が施されている。胴部の上方は4段の区画内に丸文、暦文、渦文などが並べられている。繰り返しの文様は印によるが、3段目には手彫りの線文が見られる。下方には草文のような円弧を交互に表し、間に鳥文を配している。内面と口部にも青みを帯びた釉葉が掛けられ、蓋は塗り蓋を伴う。底部は無釉の碁笥底であり、胎土は赤みを帯びている。八代焼に類例は見られないが、肥前の武雄系とも異なり、この年代では八代焼と推測される。(鈴田)



わらばいゆうてつきすいぢゅう
52. 藁灰釉手付水注

江戸時代(19世紀)

1口

高20.4、口径8.5、最大径22.3、底径10.6×11.0、
(蓋)高3.1、口径8.9

小代か

M1234 (小代焼手付水注)

藁灰釉が全体に掛けられ、褐色の素地と相まって海鼠釉風の青みを帯びた釉調となっている。板作りによる帯状の把手が付けられ、注ぎ口も粘土板を貼り合わせた作りである。こうした形状は漆器の銚子を模したと推測され、この注器も酒次ぎとしての用途と考えられる。内面は無釉である。底は平たく碁笥状に作られている。(鈴田)



しろさつまぎんなんもんきんとう
53. 白薩摩銀杏文巾筒

江戸時代(19世紀)

1個

高5.5、口径2.0-2.2、胴径3.3

薩摩

M1583 (薩摩銀杏実蓋置)

巾筒は茶道や煎茶道で茶巾を入れる道具。金物、漆器物もあるが、陶磁器製が多い。この巾筒は銀杏を積み重ねて筒状に仕立てている。銀杏は型作りで尖った縁を境に接合されている。銀杏を5個ずつ3段に重ねるが、1段目は横向き、2段目は縦向き、3段目は再び横向きに繋いでいる。胎土はクリーム色で釉薬は透明であり貫入が入っている。京焼にも似るが透明釉の貫入の様子などから白薩摩と考えられる。(鈴田)



こくゆうたけかごがたはち
54. 黒釉竹籠形鉢

江戸時代(19世紀)

1口

高9.5、胴径19.9、最大径21.2

薩摩か

M1349 (苗代川焼黒釉籠形鉢)

竹籠を模した陶器で、全体に黒釉が施されている。底部は面状になっているが、その他はすべて竹籠と同じ構造に作られている。全面に施釉されているため胎土が見えないが、平底の一部に釉薬の薄い部分があり、薄茶色の素地が見える。貼り紙によると松平防州公より頂戴した苗代川焼の器とされる。

木箱蓋表に「なし焼／菓子鉢／式燕亭」の3行墨書、蓋裏に「友人何某大坂御留主居役在勤／の御京都御諸士代／松平防州公より頂戴の器なり／ゆへありて當家に珍藏する者也／文政中／瑞鳥館／主人復(花押)」の7行墨書あり。木箱側面に「ネい(朱字)五六七番薩摩苗代川焼 籠形鉢」の3行墨書貼り紙。(鈴田)



55. 鉄絵草文茶碗 銘 鳴立澤

江戸時代(17世紀)

1口

高7.6-7.9、口径11.6×11.8、底径5.2×5.4

萩

M543(萩草文茶碗 銘 鳴立澤)

萩焼らしい温かみのある色合いであり、透明の釉下には草文が描かれている。胴部は直線的に引き上げられているが、僅かにろくろ目が残り柔らかな印象を与えている。口部は三か所が押さえられて変化が付けられている。底部は高台内まで露胎であり、荒目の胎土には所々に小穴が見られる。これにより釉面にも窪みが生じ、変化に富んだ景色となっている。釉下の草文は呉須の成分を含むのか幾分藍色がかっている。重さ265g。(鈴田)

箱蓋覆紙墨書「鳴立澤」

箱蓋裏墨書「繪萩茶碗／銘／鳴立澤／守一記」

風呂敷墨書「繪萩鳴立澤」



56. 灰釉茶碗 銘 禿

江戸時代(17世紀)

1口

高7.7、口径14.0×14.8、底径5.9

萩

M572(萩茶碗 銘 禿)

土は荒目で高台内は無釉。釉薬は透明系の灰釉が掛けられている。内底には三つの目痕がある。高台は竹節状に削りだされ、高台脇も素地が荒いため凹凸が現れ、釉薬が掛かった部分も窪みや小穴が景色となっている。枇杷色の釉には全体に細かな貫入が見られる。木箱表には「古萩茶碗」、蓋裏に「古萩／茶碗／宗雪(花押)」の墨書がある。また書付も伴っている。重さ294g。(鈴田)

箱蓋表貼紙墨書「銘／禿カムロ／定」

風呂敷墨書「古萩茶碗／銘 禿／定」



かいゆうわりこうだいちゃわん
57. 灰釉割高台茶碗

江戸時代(17世紀)

1口

高8.4、口径12.3×14.0、底径5.8

萩

M578(萩筆洗割高台茶碗)

透明の灰釉が掛けられ枇杷色の釉調を呈している。高台は十字に刻まれ、割り高台となっている。施釉は高台脇まで及んでいるが、畳付きの一部にも釉が掛かり変化に富んだ景色となっている。碗の内部と外側にはロクロ目に残り、高台脇は削りによって現れた凹凸が荒い梅花皮(かいらぎ)風の景色を作り出している。口縁部はロクロで水挽きした後、二箇所を平たく削り筆洗形とする。(鈴田)



かいゆうわりこうだいちゃわん めい かんざんじ
58. 灰釉割高台茶碗 銘 寒山寺

江戸時代(17世紀)

1口

高9.7、口径13.0×14.0、底径6.2

萩か

M573(萩割高台茶碗 銘 寒山寺)

高台が撥状に開き胴部が丸く立ち上がる呉器手風の茶碗。釉が白く、高台が黒いためメリハリの効いた軽快な印象を与える。高台は二方を切り、割高台とする。畳付きは幅広で平たい。高台内部はゆったりと内湾して削られている。土は砂粒を含み、黒味を帯びる。釉薬との境目がくっきりとしているため、素地の黒さが際立って見える。釉薬は白濁しており、腰部の一部は釉が剥離している。胴部の両脇には窪みが設けられている。(鈴田)

外箱蓋表貼紙墨書「寒山寺(朱文円印「定」)」

外箱側面貼紙墨書「烏啼月落／寒山寺」

風呂敷墨書「古萩／銘／寒山寺」

札墨書「寒山寺」「古萩」



はくゆうちゃわん
59. 白釉茶碗

江戸時代(17世紀)

1口

高9.2、口径11.1-13.9、底径6.6

萩か

M784(唐津茶碗)

楽茶碗風の丸みを帯びた形の茶碗。口部は杓形に変化が付けられている。透明性の釉には細かな貫入がはいり、染み込みの具合が強い面は暗い灰色、少ない面は淡い灰青色を呈している。高台内と畳付きも施釉されているが、釉の薄い畳付きの部分は素地が黒い。また黒土の上に白土が残っているため、全体に白化粧土で粉引きした後透明釉を掛けたと考えられる。重さ561g。(鈴田)



そうがんはなもんたわがたはち
60. 象嵌花文俵形鉢

江戸時代(17世紀)

1口

高10.5-10.6、口径17.5×19.8、胴径20.0×18.2、
底径6.7×10.0

萩か

M1186(唐津三島俵形水指)

俵形を半身にした鉢で長方形の高台が貼り付けられている。左右には同心円状に花文と暦文を象嵌で表す。胴部中心には前後の面に化粧土で白く盛った百合の花のような文様が施され、鉄絵の具で線が加えられている。高台の付け根には化粧土が塗られ、足部の装飾となっている。やや青みを帯びた透明釉は全面に掛けられている。この種の器形は元々は祭器とされるが、塗り蓋が付けられ水指として用いられた。(鈴田)



はくゆうかけけちやわん めい し ば の と
61. 白釉掛分茶碗 銘 柴之戸

江戸時代(17世紀-18世紀)

1口

高8.5、口径12.4×13.4、底径5.4-5.5

萩

M588(古萩茶碗 銘 柴之戸)

筒形の高台から丸みを帯びた足部へと立ち上がり胴部は口部まで平たく開く。胴部は一面だけ平たく押さえられて変形している。内面には帯状に白い薬灰釉が掛けられ、外面片側にも連続して三角状に薬灰釉が高台側面まで流れ落ちている。高台内と畳付きは無釉。畳付きは平たく、内面は湾曲して削られている。釉薬全体に細かな貫入が入り、薬灰釉の部分は透明釉の貫入より大きい。また薬灰釉は僅かに紅色を帯びている。木箱蓋表に「堀内不識斎書付萩焼／茶盃銘柴之戸」の墨書。重さ292g。(鈴田)

内箱側面貼紙「(朱文椿印)「淡／如水」」





62. 白釉横唄香合^{はくゆうよこばいこうごう}

江戸時代か(17世紀)

1合

高3.5、幅6.0、奥行3.8

萩

M1492(古萩横唄香合)

巻貝を横たえた形の香合。底部との合わせ目を除く全面に貫入の入る白釉が掛けられている。釉の溜まる部分には淡い青色を帯びた発色の箇所がある。底部には、錆釉が掛けられており、周辺に熔着痕が認められる。横唄(よこばい)形香合は、形物香合番付には染付で登場する。(参考:安政二年『形物香合一覧』西四段目六位「染付横唄香合」)(仲野)



63. 茶器 銘 著露軒^{ちやき めい チョロケン}

桃山時代(16世紀)

1口

高9.8、身高8.3、口径7.9、最大径8.2、底径6.7、
(蓋)高2.8、径8.0

備前

M1419(備前茶器 銘 チョロケン 銘 著露軒)

身は備前、蓋は後補の赤楽。小形筒状の容器が茶器に転用されたものとする解釈が一般的であるが、四面の篋削りなどには、意図的なものを強く感じる。身は、半筒状の基本形から、胴部の押さえと縦の沈線により四面に成形されている。口縁上端は、円形のまま幅広く面取りされている。さらにその側面は鋭い沈線により波打つように幅広く区切られている。腰下部に沿って斜めに削りを入れることにより、円形の平底となっている。緻密な胎土は堅く焼き締まり、深赤色から灰白色まで、炎の流れにより変化しており、それぞれ絶妙な景色となっている。蓋を添えたのは表千家六世覺々斎(1678-1730)。鈕のある落し蓋で、淡い発色の赤楽である。身底部に梅鉢風の丸印(五弁花)と「チョロケン 左」朱漆書(銘は七世如心斎[1705-51]による)。箱蓋裏に「備前茶入／フタ覺々斎／作／左(花押)／銘著露軒ト□」(花押は七世如心斎)。(仲野)



64. 四方水指^{えぼしがつたみずさし}

桃山時代(16世紀末-17世紀)

1口

高15.2、口径17.1×16.8、底径12.5×12.3

備前

M1197(備前宇部四方形水指 銘 鳩部家)

矢筈口の方形水指。轆轤成形の後、方形に制作したもの。底部から上へ削りあげるように隅切りされているが、上部へいくほど削りは浅くなり、口縁部では隅丸方形となっている。口縁の内側、一段下がったところに幅広く面取りが巡っており、ここに蓋がのせられる構造。この形状が、矢の上端部の弦を受ける矢筈に似ていることからこの名がある。四方水指で矢筈となる例は少ない。底部を除く全面に自然釉が掛かっているが、器面は荒れている。底部に「L」字形の窠彫、丸の押印による窯印が認められる。(仲野)

外箱側面貼紙墨書「伊部水指／鳩部家(朱文円印「定」)」
風呂敷墨書「伊部四方水指／銘／鳩部家」



65. 烏帽子形水指^{えぼしがたみずさし}

江戸時代(17世紀)

1口

高13.6、口径23.1×13.5、底径15.5×11.9

備前

M1196(備前えぼし形水指 宇部焼)

菱形の水指。烏帽子箱に似ていることからこの名がある。隅丸で各辺に僅かな膨らみのある菱形の底板に予め轆轤成形した主体部を合わせ、口縁部が僅かに開くような形状で接合させている。備前特有の緻密な胎土を用いて薄手に成形されており、全面に自然釉が掛かっているが、特に火表は褐色気味の釉が流れ落ちるように掛かっている。外側面上方に数条の沈線が巡り、腰部には横に走る窠削りが認められる。内面下部に長角形押印、外面下部に窠彫りによる窯印が認められる。(仲野)



さんかくはなひげ
66. 三角花生

江戸時代(18世紀)

1口

高23.0、口径4.1-4.3、最大径10.6、底径9.4

備前

M1268(尹部三角花生)

胴部を三方から抑えた三角花生。底部は円形平底。轆轤成形された胴部は三方から強く押さえることにより、隅丸の穏やかな三角錐状の形となっている。短い肩部は僅かに膨らみをみせながら、長い頸部に繋がる。頸部はその上半が僅かに広がり口縁部にいたる。頸部には縦の沈線と貼付文により、竹節様の細工が施されている。緻密で濃い茶褐色の胎土で、全体に自然釉が掛かっているが、面により濃淡がある。底部には「L」字状の刻印が認められる。(仲野)



そうじしはなひげ
67. 双耳花生

江戸時代(18世紀)

1口

高21.3、口径9.0×8.3、最大径14.5、底径9.3

備前

M1269(尹部耳付置花生)

縦耳を伴う長胴の花生。受け口状の口縁部から、やや絞り気味の頸部が続き、いかり肩の肩部となる。肩部下半は末広がりとなり、胴部に続く。胴下部でくびれた後、下方へ順に細くなり、底部直前でさらにくびれ平底となる。口縁下部から肩部へ粘土紐による一対の縦耳が設けられ、縦に沈線が施されている。胴中下部には、横に櫛目が走っている。全面に茶褐色の自然釉が掛かっている。底部には丸印があり、枠内に花状の文様が認められるが、判然としない。(仲野)





68. 船徳利^{ふなどっくり}

江戸時代(18世紀)

1口

高29.4、口径4.1、胴径22.2、底径18.7

備前

M1273(備前花入 銘 大磐石)

底部が広く安定した形の大形の徳利。平底の底部から、僅かに拡がり丸みのある胴部を形成。急速に絞り込みながら肩部、長い頸部へと続き、やや開きながら口縁端部にいたる。腰部は篋削りと撫で成形で丸味が出され、これより上部は轆轤目が僅かに認められる。火表を中心にゴマ状の自然釉がたっぷり掛かり、斜め右下へ流れている。腰部に「㊟」の窯印がある。(仲野)

箱蓋表貼紙墨書「大磐石／定」

風呂敷墨書「古備前／花生／銘／大磐石」



69. 掛花生^{かけはないけ} 銘 ヤリサヤ^{めい}

江戸時代(18世紀)

1口

高18.1、口径1.3、最大径4.5、丸底

備前

M1442(古備前掛花生 銘 やりさや)

丸底の掛花生。肩部からほぼ真すぐに腰部にいたり、急速に拡がりをみせ丸底を形成している。底部には、摩滅痕が認められ、本来の乳棒的な用途から花器に転用されたものと考えられる。微砂粒を含む緻密な胎土は、赤褐色から暗褐色の焼き色を示すが、底部及び背面の一部は黒色を示す。

「ヤリサヤ 花押」の朱漆書銘。土岐二三在判とされる(貼紙)。

土岐二三：土肥後に土岐を名乗る。有楽流織田常知門下、又有楽門下、貞置門下とも言われる。新潟の人で名は豊隆、通称孫兵衛。享保十七(1732)年没。九十四。(『古今茶人花押集』長谷川順次監修、名古屋タイムズ社、1970年)(仲野)



70. けんすい 建水

江戸時代(18世紀前半)

1口

高8.7、口径11.7×14.2、底径11.5×12.3

備前

M1373(伊部建水)

半筒状の建水。平底の底部に、体部をのせ接合したもので、内面底部の縁を巡るように接合痕を残している。正円より僅かに楕円気味の形状。底部から口縁部に向けて、幅広く力強い篦削りが認められる。底部から口縁部へ向け僅かに拡がりを見せ、その上端部は面取されている。緻密な胎土は赤褐色に発色し、底部を除く全面にゴマ状の自然釉が掛かっている。(仲野)



71. ひだすきそうじひいれ 緋襷双耳火入

江戸時代

1口

高9.7、径11.9×11.0、底径7.6

備前

M2235(備前緋襷火入)

平底から逆八の字状に広がり口縁部の直前で、一段絞り込み端部にいたっており、上端は面取りされている。粘土紐の両端を押さえた横耳が、肩部に認められる。接合部分の器壁に斜めに櫛目を施し、接合を促している。緋襷が美しい。(仲野)



72. 緋襷徳利^{ひだすきとっくり}

江戸時代(18世紀-19世紀)

1口

高11.0、口径2.2-2.3、胴径7.8、底径5.0

備前か

M1627(古備前緋襷徳利)

全体に成形が粗く、口縁部にも歪みが認められる。口縁から、緩やかな膨らみをみせながら腰部にいたり、くの字形に変化して底部にいたる。肩部から胴部にかけて不規則なへこみが認められ、底部は僅かに上げ底である。胎土には砂粒を含み、典型的な備前の土とは異なる。(仲野)



73. 櫛目文扁形徳利^{くしめもんへんけいとっくり}

江戸時代後期(19世紀前半)

1口

高19.8、口径2.8、胴径10.1×7.2、底径6.0

産地不詳

M1272(備前船蟲形華瓶)

口縁部は、僅かに拡がり、肩部から胴部へ拡がり、腰部でくの字状に変化し底部にいたっている。肩部から腰部にかけてやや深めの沈線文が刻み込まれている。胎土はやや粗目である。(仲野)



74. 緑釉日本地図角鉢^{りょくゆうにほんちずかくばち}

江戸時代(18世紀末-19世紀前半)

1口

高6.5、縦・横31.1×31.1、脚台16.1×15.5 四脚

源内

M2374(源内焼 日本地図四方皿)

型成形で、見込み全体に日本地図を表現した方形の鉢。全面に鮮やかな発色の緑釉が掛けられている。方位盤や一部地域が、紫・黄・白などを用いた多彩色の例も知られる。外反する脚台は、四辺それぞれに型成形した後に接合されたもので、各辺ともにその中央で波頭がぶつかるような渦文が彫られている。他例では獣面四足の脚台などが知られる。さらに日本地図の他、円形皿に、アメリカ大陸やユーラシア大陸などを表現した例もあり、当時の人々の地理観の広さと知識欲の深さを示している。



源内焼：平賀源内(1729-79)が指導したとされる交趾風の色彩豊かな陶器窯(志度・香川県さぬき市)。製作された器種、文様は多岐にわたり、交趾風の色彩感と型成形を特徴とする陶器を焼いた。1755年開窯と伝える。(仲野泰裕『近世陶磁の展開と源内焼』『源内焼 平賀源内のまなざし』愛知県陶磁資料館・五島美術館、2003年)(仲野)



さんさいじゅうろうじんずかくぼち
75. 三彩寿老人図角鉢

江戸時代(18世紀末-19世紀前半)

5客

高3.6、縦・横21.7×21.5 四脚

源内

M1604(源内焼鹿仙人図四方鉢)

型成形により、見込みに寿老人図を表現した角鉢。寿老人は、団扇を持ち鹿を連れていたとされ、日本では長寿を授けるとして、七福神に数えられる。緑・白・紫・淡黄色を用いて彩色されている。同範で、彩色の異なる例も多いが、モースコレクション(米国・ボストン美術館蔵 No. 2089)の例は当該資料に近い彩色である。脚は、巻貝を型成形し、四か所に配しているが、他に菊花形四脚のなどの例が知られる。底部は淡黄色。見込に目跡3点。方形枠内に「舜民」印。(仲野)



りょくゆうふながたむこうづけ
76. 緑釉舟形向付

幕末・明治時代(19世紀中-後半)

5客

高3.3、縦・横24.3×12.0、底縦・横23.5×12.1

産地不詳

M1476(源内焼青舟形向付 交趾釉)

タタラを用い、型成形された舟形向付。数種類の粘土板を組み立て舟形を形成している。型成形の際、内面と側面に深い木目文を施している。重さ367g。

タタラ：タタラ定規などを用いて、粘土を板状、帯状にしたものをいう。また粘土板を加工し、変形させてつくる板づくりの方法を、タタラ成形という。(『角川日本陶磁大辞典』2002年)(仲野)



77. 黒楽茶碗 銘 苔清水
楽長次郎

桃山時代(16世紀後半)

1口

高9.0、口径9.0、底径6.1

楽窯

M820(黒楽筒茶碗 銘 苔清水)

楽家初代長次郎の黒楽茶碗。腰をかつきりと直角に
おり、若干内に向けて立ち上がった背の高い茶碗で、
篋目などの作意は認められない。若干かせた黒釉が総
体に掛かる。高台は大きく、高台内を円形に削り小兜
巾を残し、畳付に3カ所の目跡が残る。内面の下部の
片側のみを大きく削る。削りが始まる部分の外側には
若干の窪みがあり、そこに左手の指を置くことで掌に
すっぽりと茶碗が入る。底は深く削られ茶溜がある。
黒漆箱の内箱蓋表に赤漆で「苔志水／黒茶碗／宗室(花
押)」と仙叟宗室(1622-98)の箱書が残る。外箱蓋裏に
は「初代作／苔志水／仙叟銘／(花押)」と又玄斎一燈宗
室(1719-71)の花押があり、外箱底裏には同筆で「箱ふ
た／宗室／真筆／明和六丑年／八月求之可伝物也」と
あり、又玄斎が明和6(1769)年にこの茶碗を求めたと
考えられる。(岡)



78. 黒楽茶碗 銘 不動

作者不詳

桃山時代(17世紀初頭)

1口

高7.6、口径12.7、高台径4.9

京都

M774(黒茶碗 銘 不動)

肌理の細かい褐色の素地。腰をきっかりと垂直に折り、真っ直ぐに立ち上げ、口縁はわずかに外反する大振りの茶碗。胎は薄作りで、見込みは広く、左周りの円形の窠目が入る。薄くカセ気味の黒釉がかかり、底は土見せとする。変形の五角形の高台は低く、周囲を窠で削り、脇に朱漆の花押が据えられている。下記の宗徳宛藤村庸軒(1613-99)書状が付属し、「自作、不動くろ茶碗進候」とあるため、庸軒手造りと伝えられてきた。しかし、書状には、この件の前に、利休時代の五徳を目利きしたとあり、千利休自作の茶碗と庸軒が鑑定したことを記したのだと考えられる。形状は17世紀初頭の瀬戸黒茶碗と類似し、釉や素地もその頃の軟質施釉陶器と推定されるため、そこから製作年代を推定した。箱蓋表に「不動 茶碗」、蓋裏に「庸軒手作茶碗／箱書付同翁筆之／愈好(花押)」とある。(岡)

外箱側面貼紙「(朱文椿木印)「淡／如水」」

付属

宗徳宛藤村庸軒書状

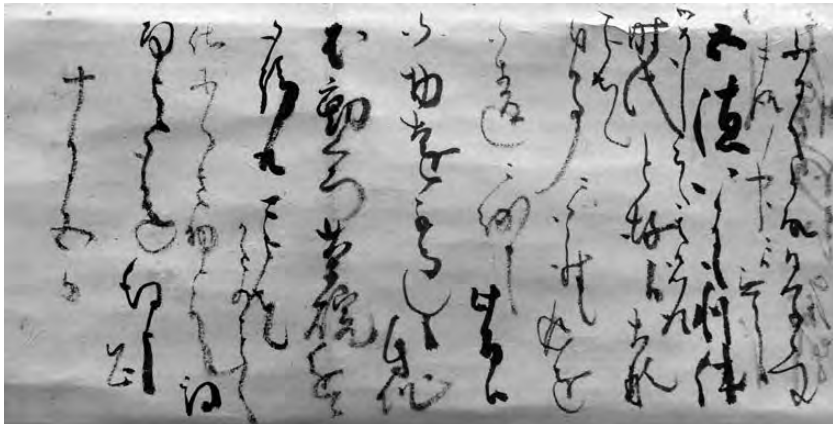
藤村庸軒

江戸時代(17世紀後半)

1紙

15.0×29.0

京都



ふるく候故見事候得共

貴様ノヤうニハ無之候

五徳いかにも利休

御存し二候、その御心得

時代と存候、大形

可被成

見事ニ御座候、返遂

御違ニ納申候、此間ハ

御物遠不過之、自作

不動くろ茶碗進候、

御受取、可被成

かたのことく

仕、にくき物とて候、期

面申、御意得申候、以上

十月五日

(端裏うハ書)

「宗徳様 庸軒」



79. 赤楽獅子香炉

楽道入

江戸時代(17世紀前半)

1口

高9.0、口径5.0-5.5、胴径8.4×13.3

楽窯

M2230(ノンコウ獅子香炉)

楽道入(1599-1656)の赤楽獅子形香炉。獅子が前足を前方に踏み込み、大きく口を開けた姿をうつす。素地は赤土で黄土をぬり総体に釉を施す。胸に三筋の横線をいれ両脇に唐草状の毛が彫られ、胴裏に「楽」印を押す。頭は黒く焦げており、あるいは後の製作かと思われる、内側に印があるが判然としない。箱蓋表「のんこ／獅子」とあり、箱蓋裏に「ノンコウ作 獅子／香炉／九代吉左衛門(「楽」印)」と楽了入(1753-1834)の箱書がある。(岡)



80. 赤楽牛香合

楽一入

江戸時代(17世紀後半)

1口

高3.0、径8.4

楽窯

M1501(赤楽牛香合)

楽家4代一入(1640-96)の赤楽香合。一文字香合の蓋に、交趾香合を模した蹲った牛を型取りする。蓋面の表の赤色が鮮やかで火替わりがあり、蓋裏や実は黒く焼けている。印はないが、香合の蓋裏に朱漆の六閑斎泰叟(1664-1726)の花押がある。合わせ口に4箇所、底に3箇所の目跡が残る。内箱の蓋裏に「一入造赤／牛香合／泰叟判有り(花押)」と作者が一入とあり、花押は不見斎石翁(1746-1801)、外箱蓋裏に「一入造／赤／牛香合／六閑斎在判／不見斎箱／玄室(花押)」とあり、花押は鵬雲斎である。(岡)





81. 黒楽茶碗 銘 ぬれ烏

らくりょうにゅう
了入

江戸時代 寛政元(1789)年

1口

高8.2、口径11.5、高台径5.2

楽窯

M581(黒楽茶碗 銘 ぬれ烏)

楽家9代了入(1756-1832)の黒楽茶碗。半筒形の茶碗の胴の側面に篋で大きく削りを回し、口作りにも変化がある。総体に黒釉をかけ、口縁に幕釉を二重かける。内面に四角の鉄跡が残り、引き出し黒の光沢をもつ。高台には3個の目跡が残り、内面を削って中央に兜巾を残す。高台脇に草書の「楽」印があり、共箱蓋表に「黒楽碗／九代了入(印)」と同じ印が残る。了入が草書印をもちいたのは、寛政元(1789)年の利休200回忌の折に製作した赤黒楽200碗か、あるいは文化8年(1811)の隠居後かだが、替え箱の蓋裏に「了入黒茶碗／ぬれ烏ト号／ふしき(花押)」と、啐啄斎(1744-1808)の花押の書付があるため、本品は利休200回忌の200碗のひとつと考えて製作年とした。(岡)



82. 赤楽落葉絵茶碗

あからくおちばえちやわん
かくかくさいげんそうぞう
覚々斎原叟宗左

江戸時代 元禄4-享保15(1691-1730)年

1口

高8.6、口径13.4、胴径14.5、高台径5.8

楽窯

M540(赤茶碗)

表千家6代家元覚々斎(1678-1730)手造りの赤楽茶碗。大振りで、口縁を内に抱え込み、腰に丸みをもち胎は分厚い。胴に篋削りを大胆に入れ、内面見込を同心円状に削る。白粒が混入した土を用い、白泥で落葉文を描き総体に透明釉をかける。暗黒色の火替わりが随所に出る。高台は低く、内は丸く削られ、兜巾が残る。高台脇に白泥で覚々斎の花押を押す。箱蓋裏に「覚々作／落葉画赤／左(花押)」と13代即中斎(1901-79)の極めがある。千家家元の茶碗は楽家の窯が焼成するのが常であるため、楽窯の焼成とし、家元時代を製作年とみた。(岡)



83. 赤楽つぼ絵茶碗

覚々斎原斐宗左

江戸時代 享保13(1728)年

1口

高9.0、口径12.05×14.2、胴径14.2×16.0、底径4.7

楽窯

M594(赤茶碗)

表千家6代家元覚々斎(1678-1730)手造りの赤楽茶碗。口縁を内に抱えこんだ、大ぶりの鉄鉢形の茶碗。口縁は歪み、重なりが縁に一カ所あり、見込に円形の範削りがある。素地は白土で、総体に透明釉をかけ、白泥で、側面に6個のつぼつぼ文、高台脇に覚々斎の花押を据える。黄土色に焼き上がるが、所々が薄赤色に発色する。周囲を範で削った小高台で、内を丸く削り兜巾を造る。箱蓋表に「楽玉茶碗／千宗左造」、箱蓋裏に「流芳／五十之内／(花押)」と覚々斎の花押があり、享保13(1728)年に楽左入(1685-1739)の剃髪に際して造った50口の茶碗のひとつとわかる。製作年もそこから推定した。(岡)



84. 赤楽飛石絵茶碗

覚々斎原斐宗左

江戸時代 享保13(1728)年

1口

高8.3、口径11.5-12.0、胴径14.0、高台径4.7

楽窯

M773(赤茶碗 銘 飛石)

表千家6代家元覚々斎(1678-1730)手造りの赤楽茶碗。素地は白粒が混じる白土。若干内に抱え込んだ半筒形で、胴に窪みがあり、見込には7本の縦縞の範目が入る。分厚く手取りは重い。総体に掛かる釉が厚いため釉割れが生じ、火替わりも随所にみられる。白泥で、側面に8個の飛石、高台脇に覚々斎の花押を押す。低い高台で周囲を範で削り、畳付の幅は広く2個の目跡が残る。高台内に小兜巾を造る。箱蓋裏に覚々斎の筆跡で「五十之内／左」とあり、図83(M594)と同様に享保13(1728)年に楽左入の剃髪に際して造った50口の茶碗で、製作年もそこから推定した。門弟の堀内宗元・住山揚甫の添状がつく。(岡)

風呂敷墨書「赤／原斐／飛石茶盃」



あからくほこかたこうごう ついめい たまでぼこ
85. 赤楽箱形香合 追銘 玉手箱
 かくかくさいげんそうき
 覚々斎原叟宗左

江戸時代 元禄4-享保15(1691-1730)年

1口

総高3.5、(蓋)高2.8、縦4.6、横8.4、(下部)高2.1

楽窯

M1512(赤楽玉手箱香合)

表千家6代家元覚々斎(1678-1730)手造りの赤楽香合。長方形のかぶせ蓋の形状で、素地は粗めの白土。釉は総体に厚く掛かり、黄土色を呈すが、部分的に橙色に発色する。身の裏面に覚々斎の花押が彫り込まれており、製作は彼の家元時代とした。内箱の蓋裏に「覚々作香合／彫判有／左(花押)」とあり、花押は9代了々斎宗左(1775-1825)である。外箱蓋裏には「原叟手造／角香合／彫判有あり／了々斎箱書付／追銘玉手箱／半床(花押)」とあるが、花押は久田無適斎宗也(1884-1946)で、香合の追銘が「玉手箱」となったとある。(岡)



くろらくちやわん めい さざえ
86. 黒楽茶碗 銘 栄螺カラ
 じょしんさいてんねんそうき
 如心斎天然宗左

江戸時代 享保15-宝暦元(1730-51)年

1口

高8.8、口径12.5、高台径4.3

楽窯

M591(黒茶碗 銘 栄螺)

表千家7代家元如心斎(1705-51)手造りの黒楽茶碗。口縁を内に抱え込み、片端を尖らせて栄螺の殻を模した形状で、内外の側面に技巧的な篋目がつく。総体に光沢をもつ黒釉を厚くかけ、側面に釉割れが認められる。高台は小さく底部に埋もれたようで、高台脇に2カ所の目跡が認められるが、焼成時に畳付の釉が流れて窯底に張り付いた跡もある。手取は重い。共箱で蓋裏に「黒／栄螺カラ／自作左(花押)」とあり、花押は如心斎で、彼の自作と分かる。製作年は彼の家元時代とした。(岡)



87. 赤楽茶碗 銘 陽鳥

あからくちやわん めい あけどり
じょしんさいてんねんそうさ
如心斎天然宗左

江戸時代 延享3(1746)年

1口

高8.7、口径12.7、高台径4.3

楽窯

M592(赤茶碗 銘 陽鳥)

表千家7代家元如心斎(1705-51)手造りの赤楽茶碗。半筒型の素直な形状で、厚い胴の下部に縦の櫛状の細かな窺目が入り、見込の中央を深く削り茶溜をつくる。総体に施釉し、明るい橙色に焼き上がる。小高台の広い畳付に3カ所の目跡がつき、内には兜巾が残る。内箱蓋裏に「赤／陽鳥／左(花押)」と如心斎の花押がある。外箱蓋裏に「五十之内／如心造赤茶碗／銘陽鳥トアリ／左(花押)」とあり、花押は啐啄斎(1744-1808)である。ここから、延享3(1746)年に、如心斎が楽家を継承したばかりの長入に焼かせた50口の茶碗と考えられる。製作年もそこから推定した。多利助宛某書状・島津種春宛幸了庵書状の2通の添状がつく。(岡)



88. 黒楽茶碗 銘 蔵六

くろらくちやわん めい ぞうろく
じょしんさいてんねんそうさ
如心斎天然宗左

江戸時代 享保15-宝暦元(1730-51)年

1口

高8.0、口径12.5、高台径4.2

楽窯

M593(黒茶碗 銘 蔵六)

表千家7代家元如心斎(1705-51)手造りの黒楽茶碗。口をやや内に抱え込んだ半筒形の茶碗で、口作りに変化があり、内外側面に多くの窺目が認められ、見込み中央を深く掘り、茶溜を作る。胎は厚く、手取りは重い。総体に黒釉を厚くかけ、側面に鉄跡があり、引き出し黒の光沢をもつ。高台は小さく、畳付には3個の目跡が残る。箱は共箱で「黒／蔵六／左(花押)」と如心斎の花押が据えられている。製作年代は彼の家元時代とした。(岡)



89. 白釉鋤形掛花入

野々村仁清

江戸時代(17世紀後半)

1口

高33.9、幅19.0、厚さ4.9

京都・御室窯

M1274(鋤形掛花入)

陶工野々村仁清の白釉鋤形掛花入。鉄分を混入させたと思われる肌理の細かい褐色の素地で、固く焼き絞まる。タタラ板2枚を重ね、上の部分を膨らませて両端を広げた異形の鋤形を切り取り、花入の形を作る。内側の口縁と表面に白釉を塗り、背面は無釉。花入の口が開くよう目を置いて焼いている。焼成後に素地の鉄がにじみ出て、釉薬の表面に褐色の染みが出ている。貫入はやや大きい。無釉の背面の上部中央に「仁清」の小印が押されている。

箱蓋表に「仁清／鋤」、貼紙に「第三十二番／仁清作／鋤形向掛花入／加州／本多家所持／伝来」と、加賀藩の家老本多家伝来とあるが、明治期に本多家の蔵を調査したおりの『本多家古文書等』には、本作品と同様の鋤花入が図示されている。出光美術館にも類似する鋤形花入が所蔵されている。(岡)



90. 錆絵山道文茶碗 銘 東山

野々村仁清

江戸時代(17世紀後半)

1口

高7.8、口径13.0、胴径13.2、高台径4.4

京都・御室窯

M781((×仁清)茶碗 銘 東山)

薄褐色の固い素地。高台脇から斜めに立ち上がり、胴をわずかに締め、口縁を内に抱え込んだ茶碗。胎は薄造りで、轆轤回転を利用して錆絵で胴部に曲線の山道文を描き、白濁した志野のような釉薬をかける。貫入は大きい。底は土見せで、高台内に「仁清」の彫り銘がある。根津美術館が所蔵する御室窯跡の表面採集陶片に同筆の彫り銘をもつものがあり、窯の生産基盤となる数茶碗のひとつと考えられる。真葛長造(1796-1851)が本作品の写しを製作している。「東山」銘は画家の熊谷守一(1880-1977)がつけ、自筆箱書も残る。(岡)

内箱蓋裏墨書「仁清／銘／東山／九十二才／守一記」

内箱風呂敷墨書「仁清／東山」

風呂敷墨書「仁清茶鉢／東山」



かいゆうひらちゃわん
91. 灰釉平茶碗

ほんあみこうほ
本阿弥光甫

江戸時代(17世紀後半)

1口

高6.0、口径16.8、高台径5.5

京都

M790(平茶碗)

本阿弥光甫(1601-82)の平茶碗。白石混じりの荒い褐色の素地で、高台から真っ直ぐに開口した平茶碗の内面のみに白濁した灰釉を掛け、一筋釉が側面に垂れ景色を作る。側面には石の動き跡が認められ、高台内は荒く削られ、高台脇に光甫の号である「空中」銘が彫り込まれる。箱蓋表に「六番 上」「空中 平茶碗」の貼紙がある。光甫は京都で借窯して本焼きしたと思われるが、何処の窯かは不明。(岡)



くろらくちゃわん めい たけ
92. 黒楽茶碗 銘 竹

たいこうそうげん
大綱宗彦

江戸時代(19世紀前半)

1口

高8.1、口径11.5、高台径4.2

京都

M816(黒茶碗 銘 竹)

大徳寺黄梅院の臨済僧大綱宗彦(1772-1860)手造りの黒楽茶碗。片側面のみが下膨となり、手取りが軽い薄造りの茶碗。総体に黒釉が分厚くかかり、口縁内側に鉄跡が残るため、引き出し黒の光沢をもつ。見込中央に小さな茶溜を作る。高台は変形しており、畳付に3箇所が目跡が残る。共箱の蓋裏「手造／銘竹／大綱(花押)」とある。焼成窯は不明だが、永楽保全と親交しており、永楽窯で焼成したとも考えられる。(岡)





こそめつけうつしたつばいこうごう
93. 古染付写立唄香合

あおきもくべい
青木木米

江戸時代(19世紀)

1合

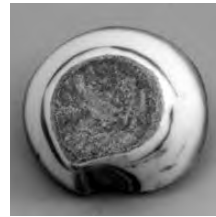
高4.2、胴径4.1、底径2.1×2.5

京都

M1519(染付立唄香合)

作品自体に銘はないが、箱に木米による墨書と朱印がある。箱書の書体や箱の材質は木米の真作に良く見られるものであり、捺された朱印は木米の基準印。同様の例は木米の作品に複数確認できる。「古染付」と呼ばれる中国明時代末期(17世紀)の景德鎮窯製品を木米が忠実に写した作例。江戸時代後期(19世紀)に香合の賞玩が高まり、木米や仁阿弥道八らが古染付や交趾などの香合の忠実な写しを制作し、幕末には相撲の番付に準えた香合の番付が版行された。重さ32g。

箱蓋表墨書「青花貝／香盒／木米作(朱文橢円印「木米」)」(梶山)



こうちゆうりゅうほうちんさんぞくこうろ
94. 交趾釉龍鳳文三足香炉

あおきもくべい
青木木米

江戸時代(19世紀)

1合

総高14.6、口径10.2×14.6

京都

M1527(交趾写三足香炉)

銅器を模し型で成形されている。型で施文された龍と宝珠、鳳凰に紫釉、雲に緑釉を塗り、地を黄釉で埋める。三足の付け根に「木米」印が捺されている。類例が他に2点(個人蔵・高津古文化会館蔵)知られている。『説田家藏品展観』(東京美術倶楽部、昭和6年5月19日入札)掲載品。説田(ときた)家は、江戸時代から続く江戸新川の下り酒問屋で、明治期の当主彦助(1848-1928?)は、日本商船株式会社社長などを務め、文人画の秀作を所蔵していた。重さ229g。(梶山)





95. 南蛮写急須

青木木米

江戸時代(19世紀)

1口

高9.8、口径4.3、胴径8.9、幅11.3、底径4.6

京都

M1552(南蛮写急須)

中国の南部からもたらされた焼き締めの陶器は、江戸時代の日本で「南蛮」と総称された。素焼きによる本作も南蛮物を意識している。底裏には火にかけた際の煤が付着する。内側の注口との接合部分には、茶漉し穴が6つ開けられている。明治時代初期に茶葉を小さく刻んだ玉露が登場すると、茶漉し穴は小さくなり数が20以上と多くなる。それ以前の天保から嘉永年間頃(1830-50年代)までは、茶葉が大きいいため、穴は大きく7つ前後までとなる。把手裏に「木米」印。重さ109g。箱蓋表墨書「摹蠻物著／急須髷米／(朱文楕円印「青來」)(朱文楕円印「木米」)」(梶山)



96. 南蛮写急須

青木木米

江戸時代(19世紀)

1口

高9.2、口径4.5、胴径8.3、幅12.1、底径4.5

京都

M1554(南蛮写急須)

素焼きによる南蛮物を意識した急須。把手裏に捺された印は木米の基準的なもの。底裏には火にかけた際の煤が付着する。箱書には「成化土」により制作したと記す。江戸時代の日本において、明・成化年間(1465-87)は、中国で優れた陶磁器が作られていた時代と認識されていたことから、この文言を用いた可能性があり、木米の他の作品にもわずかに使用が確認できる。更紗の仕覆が付属する。茶漉し穴は5か6(内側上部が不明瞭)。重さ85g。

箱蓋表墨書「依成化土製／九々鱗木米造／(朱文楕円印「青來」)(朱文楕円印「木米」)」(梶山)





はくじそうりゅうほうじゅもんきゅうす 97. 白磁双龍宝珠文急須

あおきもくべい
青木木米

江戸時代(19世紀)

1口

総高10.3、身高6.8、口径6.5、胴径9.8、幅13.0、底径6.0
京都

M1553(白磁双龍宝珠文急須)

身・蓋・鈕は型で成形・施文されている。「白高麗」と総称された中国福建省の徳化窯製品を意識したもの。底裏に火にかけた際の煤が付着する。作品自体に作者を示す銘はないが、箱書の書体と捺された朱印は、木米の基準印。同型品が2点確認でき(入間市博物館・『日本の陶磁』13京焼(中央公論社、1989年)掲載品)、前者の把手と蓋裏に捺された印は基準的なもの。後者の把手と蓋裏にも印が捺され、共箱に納まる。茶漉し穴7つ。重さ111g。

箱蓋表墨書「雙龍／識文／白瓷／煎茶壺／木米造／(朱文方印「古器観／木米製」)(梶山)

はくでいさんぼうろ 98. 白泥三峰炉

あおきもくべい
青木木米

江戸時代(19世紀)

1口

高14.2、上部幅(口径)11.0、底径(三脚)8.2

京都

M1563(聾米揚名合利炉)

日本で煎茶を広めた売茶翁高遊外(1675-1763)が所持し、その後大阪の煎茶家花月菴に伝わった中国製の涼炉を忠実に模したもの。花月菴の祖である田中鶴翁(1782-1848)と木米は親密な交流を結んでいた。底裏に捺された「木米」印や、箱蓋表の墨書と朱印は、木米の基準的なもの。風を送り火力を調節する「風門」の上方に捺された「楊名／合利」銘の葉形印は、彫り表されている。同工の類例が5点程知られており、当時の需要が推測される。重さ429g。

箱蓋表墨書「聾養爐／有印／楊名／合利／栗田□(治カ)工／聾木米造／(朱文方印「塙埴／之工」)※上下逆さに捺す(朱文方印「鶴雄／之職」)(梶山)





99. 交趾釉象形鈕印材

こうちゆうぞうがたちゅういんざい
伝青木木米

江戸時代-昭和時代(19世紀-20世紀)

1口

高5.5、幅4.2×4.8

産地不詳

M2443(木米陶印(象鎮)「淡如水」)

黄釉と紫釉を塗り分けた「交趾焼」スタイルの陶印。印面に「淡／如水」の文字が彫られる。ただし、側面に捺された「木米」楕円印は、特定の顧客のために制作したという銘文を木米自身が彫っている基準作例のものとは異なる。本作は「米」の字の上の点2つが直線的で傾斜角度が緩いが、基準作は「米」の字の上の点2つが曲線を描き、傾斜角度がきつい。また一、二、五、六画目が、三、四画目の「十」の交点まで伸びていない点も、基準印と異なる。後世の模倣作と考えらえる。重さ88g。

箱蓋裏墨書「木米陶印／淡如水」、箱蓋裏貼紙「(朱文楕円印「淡／如水」)」(梶山)



100. 青交趾写菓子器

あおこうちゅうしかり
永楽保全

江戸時代 文化14-天保14(1817-43)年

1口

高7.7、口径15.3、高台径6.5

京都・永楽窯

M1325(青交趾菓子器)

京焼陶工永楽保全(1795-1854)の青交趾写の菓子器。素地は薄褐色の肌理細かな土。やや開口した独楽形をなし、表面に轆轤目を強く残す。高台縁まで縁がかった青交趾釉を掛けるが、内面は二重掛けしたため、縁から釉薬が流れて房状の文様を作る。畳付は無釉で高台裏中央に「永楽」印を押し透明釉をかける。共箱裏に「(印)善五郎／造」、蓋裏に「青交趾鉢／善五郎作／了々斎(花押)」と了々斎(1775-1825)の極めがあり、保全の善五郎時代を製作年とした。(岡)



101. 祥瑞写唐子丸文鍋湯飲

永楽保全

江戸時代 文政10-天保14(1827-43)年

1口

高11.6、口径8.8、高台径8.0

京都・永楽窯

M783(祥瑞写茶碗)

永楽保全(1795-1854)の染付磁器。やや開口した湯飲みの外面を二重線で上下に割り、下部には型で鍋文を作り、染付で祥瑞丸文を描く。上部に八手と唐子文、内側には山水楼閣図が描かれる。口紅は鏤絵で、内側面に「河濱支流」印を押す。総体に透明釉を掛けるが、高台の畳付は無釉。高台内側、二重円圏内に「大日本／永楽造」の染付銘がある。共箱で蓋表に「シノ木丸紋／祥瑞湯飲」、箱蓋裏「永楽」印／善五郎／造」とある。「河濱支流」印は文政10(1827)年に紀州藩主徳川治宝から賜わったもので、その年から保全が善五郎を名乗った時期の終わりまでを製作年とみた。本焼は粟田などで借窯したが、細工は永楽工房で行ったと考えられるため、産地を永楽窯とした。(岡)



102. 金彩色絵蓬萊山注連縄吉祥文茶碗

永楽保全

江戸時代 天保14-弘化4(1843-48)年

1口

高9.2、口径12.2、高台径4.7

京都・永楽窯

M788(色絵吉祥文茶碗)

永楽保全(1795-1854)の祝儀茶碗。素地は卵色で固く焼き絞まり、丸碗の高台脇まで白釉をかけて、外側に金と青で、蓬萊山や鶴、小槌等の吉祥文を絵付する。注連縄文から年末に贈られる祝儀茶碗とわかる。高台脇に「河濱支流」印を押し、畳付の角が削られ、中央に左回転の削目が残る。共箱で蓋表に「注連縄之画／仁清形茶碗」、蓋裏に「(「永楽」印)善一郎／造」と記される。仁清形とあるが、この様式は本歌に認められない。保全が善一郎を名乗った時期を製作年とした。保全は粟田辺りの窯場で借窯して本焼焼成したと思われるが、絵付け等は永楽工房で行なったため永楽窯とした。(岡)



103. 交趾写魚形水注

永楽保全

江戸時代(19世紀後半)

1口

総高17.8、注口径1.5×2.0、最大径20.3×9.1、底径7.5

京都・永楽窯

M1230(交趾写魚形水注)

永楽保全(1795-1854)の交趾写魚形水注。素地は赤みを帯びた薄褐色の肌理細かな土。二枚型を用いて魚を作り、注ぎ口、把手、底等をつける。魚の頭と尾は緑、その他には黄交趾釉を塗り、低火度で焼き付ける。高台畳付は無釉だが、高台内は施釉し、中央に「永楽」印を押す。箱蓋表に「模交趾／魚形水次」、箱蓋裏には「家父保全作／(「永楽」印)／善五郎識」と永楽和全(1823-96)の極めが記されている。低火度焼成のため永楽工房で焼成したと考えられる。(岡)



からつつしちやわん
104. 唐津写茶碗

えいらくぼぜん
永楽保全

江戸時代 嘉永4-7(1851-54)年

1口

高7.1、口径10.5、高台径3.8

近江・湖南窯

M1144(唐津茶碗)

永楽保全(1795-1854)の唐津写の小茶碗。素地は鉄分を混入したと思われる黒色の土。腰を篋で大きく削り、腰から口を開いて膨らみなく立ち上がらせ、胴を前押しにして石ハゼを入れる。片側面を大きく土見せにして灰釉を掛ける。高台は竹節で薄く高い。周囲に篋で一筋彫りこみ、高台脇に縮緬皺を作る。何れも唐津焼の特色を写している。高台脇に「永楽」印を押す。箱蓋表に「模唐津 茶碗」、箱蓋裏には自筆で「於湖南／（「永楽」印）保全造」とあり、保全が近江大津に開いた湖南窯の作品で、その時期を製作年とみた。重さ198g。(岡)



そめつけさびえしょうじゅもんちやわん
105. 染付錆絵松樹文茶碗

かざりや
錆屋

江戸時代(18世紀後半)

1口

高7.8、口径10.2、高台径4.6

京都・栗田口・岩倉山窯

M541(色絵茶碗 銘 岩倉山 錦光山)

乾山写の茶碗。胎土は卵色。腰が丸く、口縁の下を窪みませた茶碗の片面に染付と錆絵で光琳松を描く。見込に円圈を削り、表面の腰に轆轤の回転を利用し削り目を残し、高台脇に「岩倉山」の隸書印を押す。岩倉山窯の前身は、17世紀の御菩薩池焼で、18世紀前期に栗田に移転した。宝暦6(1756)年には当主の錆屋吉兵衛が公儀御用品調進役に任命されている。京都御所東方公家屋敷遺跡の18世紀後半の遺構である、土壇45から「岩倉山」印の光琳松文鉢が出土しており、この頃の製作と考えられる。作者は吉兵衛か、次代の当主と思われるが、明確でないため錆屋とした。(岡)





106. 割高台茶碗

江戸時代(17世紀後半-18世紀)

1口

高8.4、口径13.2×12.3、高台径6.6

朝日

M808(朝日碁笥底茶碗)

口縁部を1ヶ所わずかに押した形は、大名茶人小堀遠州(1579-1647)の好みとされ、朝日焼をはじめとする、遠州好みの茶器を制作した窯の茶碗に散見できる。底裏を削り込んで外側を円環状に高台とした「碁笥底(ごけぞこ)」で、高台の三方を削り「割高台」とする。高台の内側に「朝日」印が捺されている。胴下半部を大胆に削った窺目や、高台内に残る左回転ロクロによる渦状の削り目は、高麗茶碗を模倣したもの。重さ335g。

箱蓋表貼紙墨書「朝日焼／(朱文方印)茶碗」

箱蓋裏貼紙墨書「朝日茶碗／一知菴／什」

箱身側面貼紙墨書「朝日焼／(朱文方印)茶碗」、貼紙「(朱文橢円印「淡／如水」)」(梶山)



107. 呉器写茶碗

江戸時代(17世紀-19世紀)

1口

高7.8、口径11.3×9.9、高台径5.0×4.8

伝朝日

M542(朝日茶碗)

朝鮮半島で17世紀に作られた呉器茶碗を写したもので、高台の1ヶ所を削り欠く。外側面に鉄絵で斜線が引かれる。内底に小さな目跡を残すが、重ね焼きをした際の融着を防ぐ支持具を挟んだ跡ではなく、モデルとなる呉器茶碗の特徴を模倣したもの。京都宇治で作られた朝日焼として伝わるが、通常朝日焼に捺される「朝日」印は確認できない。同様の呉器写茶碗は江戸時代を通じて日本各地の窯で作られているため、生産窯の判別・特定は難しい。重さ168g。(梶山)



108. 色絵柳桜文竹筒形花生 いろえりゅうおうもんたけふしがたはなけ

江戸時代(18世紀後半-19世紀前半)

1口

高18.2、口径2.9、底径2.9

京都

M1441(古清水桜柳絵 筒花入)

卵色の胎土のたたら板を円形の筒にして丸底をつけ、竹筒を模す。花生を立てるために三足があったが、それが欠損して土見せとなっている。底は無釉。青、緑で柳枝と葉を描き、数個の赤色で数個の桜花を散らした洒落た意匠の花生。箱蓋表に「柳花之絵／古清水細花生」との箱書がある。いわゆる「古清水」だが、赤色が使われ、青色も淡いため、18世紀初頭まではさかのぼらない。(岡)



109. 染付桃形向付 そめつけももがたむこうづけ

江戸時代(19世紀前半)

1口

高7.5、口径11.2×13.6

京都

M1359(おむろ焼小鉢)

硬く焼きしまった肌理細かい素地をもつ。長方形の碗の片方に染付で枝をつけ桃に見立てた向付。土見せの碁笥底で中央に「仁清」の小印を押す。胎は薄く、白釉がかかり、貫入は細かい。同様式の団扇形の向付もあるが、桃実や団扇の洒落た意匠は17世紀には認められず、貫入の細かさから19世紀の仁清写しと思われる。箱蓋表に「おむろ焼 小鉢」とあり、側面に「閑香／真葛」の瓢形印が認められるため、真葛窯の製品かとも思われる。(岡)

大田垣蓮月の陶磁作品について

蓮月(1791-1875)は江戸時代後期の京都の歌人として知られる。能書家でもあり、晩年、手造りの陶器に、自作の和歌を記した作品を多く残している。焼成は、栗田口の帶山与兵衛窯や五条坂の清水六兵衛窯などとされる。多くは、手捏ね成形であり、一部器面調整の最後に轆轤などの回転台を用いている例もある。情景や文字の表現には、鉄絵具や呉須などの彩料を用いて筆書きされたものの他、釘彫りによるものがある。釘彫りは、土の性質、乾き具合など制作上の知識を熟知する必要があり、難易度が高い。また、釘彫りの多くは、素地の上に白化粧土が施されており、鋭利な工具で、これを掻き落とすことにより、素地との色調の差が生じ、文字部分が浮き上がるように見える。最後に透明釉を掛けている。作品の内、制作年齢から明治時代に入るものも認められるが、一括してここで扱った。

作品に記された和歌の翻読並びに所収歌集との照合については、柏木和子氏による。



110. 平茶碗

ひらちゃわん
おおたがきれんげつ
大田垣蓮月

幕末-明治時代(19世紀)

1口

高4.3、口径13.6、高台径6.6

京都

M538(平茶碗)

手捏ね成形による平茶碗。口径は広く、全体に浅い形状で上端部三か所が、内側に押さえられている。付高台である。見込みに褐色気味の呉須を用い、老松と四阿が描かれており、一般的な碗とは趣を異にしている。高台及び外面底部を除く全面に白化粧土が施されている。見込側面に「山さどハ」と釘彫りされており、側面に彫られた歌に続く。底部、高台及び高台脇を除く前面に透明釉が掛けられている。外面底部は、粘土を丸めたものを、花卉状に並べたように見え、花柄のようにも、窯道具の跡にも見える。外側面「蓮月」彫銘。(仲野)

見込及び外側面に釘彫「山さとは」「松の声のみ ききなれて かぜふかぬ日は さびしかりけり 蓮月」。『海女の刈藻』242所収。



111. 茶碗

ちゃわん
おおたがきれんげつ
大田垣蓮月

幕末 慶応3(1867)年

1口

高7.1、口径10.3-11.2、底径5.3

京都

M539(茶碗)

手捏ね成形の後、回転台等により、器面を撫で整形された茶碗。胴部中段を絞り込み変化を付けている。付高台。鉄分が多く砂粒を含むやや粗い胎土で、暗褐色に焼きあがっている。外面底部、高台及び高台脇を除く全面に透明釉が掛けられている。やや厚手で重厚な仕上がりである。側面に「世のちりを…」の歌が釘彫りされている。「蓮月」彫銘。箱蓋裏「洛北 蓮月 七七才」墨書。(仲野)

外側面に釘彫「世のちりを よそにはらいて ゆく末のちよをしめたる やどの松風 蓮月」。『海女の刈藻』302所収。





112. 鉢
おわたがきれんげつ
大田垣蓮月

幕末・明治時代(19世紀)

1口

高8.8-9.4、口径14.8-15.1、底径8.8

京都

M1331(蓮月「野に山に…」菓子器)

手捏ね成形による小鉢。三段の粘土紐を薄く広げながら積み重ねており、内面上段には指圧痕がめぐっている。付け高台径は大きく安定感がある。胴部をめぐるように「のに山に…」の歌が、闊達な筆運びで鉄絵付されており、反対面の腰部に四阿が描かれている。外面底部及び高台部を除く全面にやや黄褐色気味の透明釉が掛けられている。腰下部「蓮月」鉄絵付銘。(仲野)

外側面に鉄絵付「のにやまに うかれ〜て かへるさを ねやまでおくる 秋のよの月 蓮月」。『海女の刈藻』139所収。



113. 亀香合
かめこうごう
おわたがきれんげつ
大田垣蓮月

幕末・明治時代(19世紀)

1合

器高3.2、径6.7×4.3

京都

M1498(亀香合)

亀形の香合。大胆な匏削りで甲羅が表現され、その硬さが伝わるようである。一方、首だけ出した姿はユーモラスでもある。やや粗い信楽風の土を用いて焼き締められており、器面に点在する自然釉が美しい。外面底部には、縦に幅広い削りが二本入り、「蓮月」銘が彫り込まれている。(仲野)





てつえじんぶつずとっくり 114-1. 鉄絵人物図德利

おおたがきれんげつ
大田垣蓮月

幕末-明治時代(19世紀)

1客

高11.3、口径4.3×4.0、胴径6.5、底径4.6

京都

M1625(德利2個)

手捏ねにより薄く成形された德利であるが、制作時からの組み物ではない。

頸下部から穏やかに膨らみをもち、平底の底部にいたる形状である。口縁部上端は不揃いであるが、僅かに鳶口状の片口が形成されている。胴部には大津絵を彷彿とさせる「藤娘」と「奴」が描かれており、一つの作品に両者を描いた珍しい例である。呉須を用いて縦に「いにしへ能」と、「蓮月」の銘が書かれている。腰部下端及び外面底部を除く全面に、やや黄褐色気味の透明釉が掛けられている。釉境は赤褐色を呈す。(仲野)

鉄絵付「いにしへ能 (てぶりゆかしき うつしゑの世にながれたる 藤波の花) 蓮月」。『海女の刈藻』281所収。

とっくり 114-2. 德利

おおたがきれんげつ
大田垣蓮月

幕末-明治時代(19世紀)

1客

高10.7、口径4.0×3.7、胴径5.8-6.0、底径4.9

京都

M1625(德利2個)

比較的丁寧に成形された口縁部上端から、頸部、不規則に膨らむ胴部をへて平底の底部にいたる形状である。胴部には、「うかれきて…」の歌と、「蓮月」の銘が釘彫りされている。化粧土が施されており、外面底部を除く全面に、黄褐色気味の透明釉が掛けられている。やや大きめの貫入が認められる。(仲野)

外側面に釘彫り「うかれきて 花の露にねむる也 こはたが夢の こてふなるらん 蓮月」。『海女の刈藻』47所収。



115-1. 徳利

とおたがきれんげつ
大田垣蓮月

幕末-明治時代(19世紀)

1客

高11.5、口径5.3、胴径6.8、底径5.8

京都

M1626(酒壺2個)

端部が不揃いの口縁部に太い頸部、胴部は僅かに拡がりをもせ腰部をへて底部にいたる形状。成形は、底板に胴部を積み重ね薄手に仕上げられている。頸部から胴部にかけて「よな…」の歌が鉄絵付されている。腰下部には、歌に因んで台に寄せられた砵が描かれている。外面底部を除く全面に黄褐色気味の透明釉が掛けられている。「蓮月」鉄絵付銘。(仲野)

鉄絵付「よな〜に うちてぞまされ から衣 ころもふけゆく秋しのゝ里 蓮月」。『海女の刈藻』148所収。

115-2. 徳利

とおたがきれんげつ
大田垣蓮月

幕末-明治時代(19世紀)

1客

高11.1、口径4.7×4.5、胴径6.5、底径6.1-6.4

京都

M1626(酒壺2個)

端部の不揃いの口縁部に頸部、僅かに拡がりをもせ底部にいたるが、縦軸がずれており、胴部の膨らみは左右不揃いである。成形は、底板に胴部を積み重ね薄手に仕上げられている。頸部から胴部にかけて「やどか…」の歌が鉄絵付されており、裏面下部には、歌に因む五弁花(桜)が描かれている。底部を除く全面に黄褐色気味の透明釉が掛けられている。「蓮月」鉄絵付銘。(仲野)

鉄絵付「やどかさぬ 人のつらさを なさけにて おぼろ月よの 花の下ぶし 蓮月」。『海女の刈藻』55所収。



116-1. 徳利

とおたがきれんげつ
大田垣蓮月

幕末-明治時代(19世紀)

1客

高13.3、口径3.3、胴径6.8、底径5.8

京都

M1636(徳利1、盃1)

両者は作風が異なり、当初からの組み物とは考えにくい。

手捏ねによる寸胴の徳利。底部は貼り付けで上げ底である。胴部に「よろづよも…」の句が釘彫りされている。内外面底部を除く全面に透明釉が掛けられている。「蓮月」彫銘。(仲野)

外側面に釘彫り「万世も たえぬながれとしめつらん そのかめの尾の山の下水 蓮月」。『海女の刈藻』308所収。

116-2. 盃

とおたがきれんげつ
大田垣蓮月

幕末-明治時代(19世紀)

1客

高2.8、口径6.5、底径2.9

京都

M1636(徳利1、盃1)

手捏ね成形であるが、回転台などを用い、薄手に仕上げられている。器面調整も丁寧で、口縁端部が朝顔形に開いている。高台部及び外面底部を除いて白化粧土が施されており、見込み部の「むさし野」を始め外側面に釘彫りされた文字が浮きあがっている。全体に薄手に仕上げられており、器面を損なうことなく釘彫りするタイミングの捉え方と手早い作業が窺われる。「蓮月」彫銘。(仲野)

見込及び外側面に釘彫り「むさしの」尾花が末にかゝれるは たがひきすてし 弓はりの月 蓮月」。『海女の刈藻』140所収。



117. ^{さかづき}盃
おわたがきれんげつ
大田垣蓮月

幕末・明治時代(19世紀)

1口

高4.7、口径7.2、底径2.5

京都

M1637(盃(ひなつるの...))

手捏ね成形で、腰部から口縁部へ直線的に開く形状である。外面のみ回転撫で調整が認められる。全体にやや厚手であるが、高台部を含む全面に白化粧土が施されている。外側面に釘彫りされた「ひなつるの…」の文字部分は、掻き落とし状態となり、素地との色調に差が表れ、文字を引き立てている。高台部、外面底部を除く全面に透明釉が掛けられている。「蓮月 八十一才」彫銘。(仲野)

外側面に釘彫り「ひなづるの ゆく末とほき 声きけば みよをちとせと うたふなりける 蓮月 八十一才」。『海女の刈藻』307所収。



118. ^{さかづき}盃
おわたがきれんげつ
大田垣蓮月

明治時代 明治4(1871)年

1口

高4.3、口径7.1-7.3、底径2.4

京都

M1639(盃(さきそめし...))

手捏ね成形で、腰部から口縁部へ直線的に開く形状である。成形、施釉などM1637に近い作調である。外側面には、釘彫りによる「咲そめしちよの…」の歌が認められる。「蓮月 八十一才」彫銘。(仲野)

外側面に釘彫り「咲そめし ちよのむかしも ゆく末の秋のかぎりも しらきくの花 蓮月 八十一才」。『海女の刈藻』拾遺557所収。



119. ^{さかづき}盃
おわたがきれんげつ
大田垣蓮月

幕末・明治時代(19世紀)

1口

高3.3、口径7.3、底径3.1

京都

M1640(盃(まつかぜは...))

手捏ね成形で、腰部から口縁部へ直線的に開く形状である。成形、施釉などM1637に近い作調である。内面の化粧土にむらが有る。側面には、釘彫りによる「松風ハ 秋を…」歌が認められる。「蓮月 八十一才」彫銘。(仲野)

外側面に釘彫「松風は 秋をしらべて ののみやの しめのうちなる すずむしの声 蓮月 八十一才」。『海女の刈藻』133所収。



120. ^{さかづき}盃
おおたがきれんげつ
大田垣蓮月

明治時代 明治4(1871)年

1口

高4.2、口径7.2、底径2.3

京都

M1638(盃(のにやまに...))

手捏ねにより成形され、丸味のある腰部から口縁部上端が僅かに開く形状である。腰部の三方向にへこみがあり、内面に穏やかな盛り上がりをみせている。やや厚めであるが、内外面ともに撫で調整されており、白化粧土が施されている。高台及び外面底部を除く全面に、透明釉が掛けられている。見込み側面に「のに山ニ」の釘彫りがあり、外側面の歌に続いている。「蓮月」彫銘。(仲野)

見込及び外側面に釘彫り「のにやまに」「うかれ〜て かへるさを ねやまておくる 秋のよの月 蓮月」。『海女の刈藻』139所収。



121. ^{さかづき}盃
おおたがきれんげつ
大田垣蓮月

幕末-明治時代(19世紀)

1口

高2.8、口径6.3-6.5、底径2.9

京都

M1641(盃(つゆふらで...))

ほぼ同心円状にまとめられており、手捏ね成形の後、轆轤などによる仕上げが考えられ、素地の制作は、職人の手によるものと推測される。見込み側面に「露ならで」の釘彫りがあり、外側面の歌に続く。「蓮月」彫銘。箱蓋表「うかれ□□」墨書、蓋裏「こてふ□□ん 蓮月」墨書。(仲野)

見込及び外側面に釘彫り「つゆならで」「月のやどりも なかりけり はちすにうづむ 庭の池水 蓮月」。『海女の刈藻』109所収。箱蓋表「うかれきて 花野の露にねむる也 こはたが夢の」墨書。蓋裏「こてふなるらん 蓮月」墨書。『海女の刈藻』47所収。



122. ^{さかづき}盃
おおたがきれんげつ
大田垣蓮月

幕末-明治時代(19世紀)

1口

高2.8、口径6.1-6.3、底径2.9

京都

M1642(盃(たなそこを...))

手捏ねにより、全体に浅く広がる形状に成形されているが、口縁部は大きく波打っている。見込み全体を使って「たなそこを…」の歌が、鉄絵付されている。「蓮月」鉄絵付銘。(仲野)

鉄絵付「たなそこを うけてまつまも ちょやらん のめばわかゆと きくの下露 蓮月」。『海女の刈藻』306所収。



123. 白磁獅子形香合^{はくじししがたこうごう}

江戸時代(17世紀-19世紀)

1口

総高9.4、身口径3.4×4.6、足間4.0×5.3、蓋5.0×7.8

産地不詳

M1399(堅手横獅子香合)

型で成形した頭部を、蓋にあけた穴に差し込んでいる。身の内底には右回転ロクロで削った渦状の痕跡が残る。箱書にある「堅手」は、朝鮮半島で作られた磁器質のやきものに付く呼称であるが、朝鮮半島製ではなく生産地は不明。江戸時代の筆跡鑑定家である古筆了意(1751-1834)による極書が付属し、箱書の筆者を小堀遠州の三男権十郎政尹(まさただ・1625-94)と鑑定しているが、その正確性については判断が難しい。重さ259g。

内箱蓋表金粉字「堅手横獅子」

極箱蓋表墨書「かた手横獅子香合／権重郎殿筆／古筆了意副幹」(梶山)



124. 黒楽狂言袴写筒茶碗^{くろらくきょうげんばかまうつつしつちやわん}

江戸時代(19世紀)

1口

高10.0、口径7.8、高台径4.4

京都

M810(黒狂言袴写茶碗)

白土を文様に埋め込んだ、「狂言袴」と呼ばれる朝鮮半島製の青磁茶碗の様式を、黒楽で模倣したもの。高台畳付に目跡が3点残る。箱書に記された「陽明」は、五拱家筆頭の近衛家を指すことから、近衛家の庭に小規模な移動式の窯を設置して焼成した「御庭焼」である可能性が高いが、それに関する文献や類例は確認されていない。箱身底に記された花押の筆者が茶碗の制作者であり、近衛家当主の誰かである可能性があるものの、現時点では不明。

箱蓋表墨書「陽明北御殿／御庭焼黒／御茶碗」

箱蓋裏墨書「雪の／中に／ふかき／心の跡／つけてとは／れん／友のみちは／へたて／し」

箱身底墨書「(花押)」

箱身底裏墨書「代／音丸」(梶山)



らくやきみしまうつしひらびち
125. 楽焼三島写平鉢

江戸時代(19世紀)

1口

高4.3、口径22.7、高台径9.3

京都か

M1354(李朝三島鉢)

白土を象嵌した文様を特徴とする、日本で「三島」と呼ばれた朝鮮陶磁を模倣している。唐津や八代など九州の窯で盛んに写しが制作されたが、この鉢は、左回転ロクロによる削りを行う九州の窯とは異なり、右回転ロクロによる削りの痕跡が残る。また、釉薬は楽焼と同じ低火度釉を施し、800度前後で焼成されており、低火度の緑釉が内面中央部に付着する。京都や江戸などの都市で作られた写しである可能性が高い。重さ594g。

箱蓋表墨書「三島 平鉢(貼紙〈白文方印〉)」(梶山)

すいてき
126. 水滴

幕末・明治時代(19世紀後半)

1個

高2.2、縦4.7、横9.0

産地不詳(関西)

M2370(蒔絵三輪山丸形大硯箱 硯・水滴付)

(三輪山蒔絵硯箱 構成品の内)長方形の水滴。短辺中央端部に水穴、対する短辺の片隅に長方形の風穴が設けられており、平底。底部には白釉、他の全体に、むらの有る濃い緑釉が掛けられている。軟質施釉陶器。(仲野)



きびえわたふくがたとっくり
127. 銕絵御多福形徳利

江戸時代・明治時代(19世紀)

1口

高18.9、口径2.3、幅14.9×8.5、底径7.9×6.6

産地不詳

M1629(古丹波お福徳利)

御多福の頭部を表した土型から起こした2枚を、前後に貼り合わせている。面貌に白い化粧土を塗布し、眼と眉、口元を銕絵で加筆して透明釉を施し、頭部は黒い鉄釉を掛けて頭髪を表す。底部に貼り合わせた痕跡である筋が残っているが、このような痕跡を有する作例は、現在のところ丹波焼には確認できない。青みを帯びた透明釉も、通常やや黄味がかかる丹波焼の釉薬とは異なる。従って、生産地が丹波である可能性は低く不明。重さ418g。

箱蓋表墨書「古／丹波お福徳利」

箱身側面貼紙墨書「古丹波／お福徳利」(梶山)



いろえうちわもんひいれ こうろ
128. 色絵団扇文火入・香炉

江戸時代・明治時代(19世紀・20世紀)

2客

A 高8.0、口径10.0、高台径6.4

B 高7.8、口径9.5×9.7、高台径6.3

関西系

M1394(平佐焼(薩摩)団扇絵火入れ)



色絵で口縁部に格子文を配し、下方に金銀赤の彩色で団扇文を描く。素地はややガラス質であり、釉薬は青みを帯びる。高台内には福字銘を記す。2点とも同程度のサイズで同文であるが、片方は透かし文入りの銅製蓋を伴い香炉仕立てとなっている。重さ278g。(鈴田)



そめつけさんにんからこふたおき
129. 染付三人唐子蓋置

江戸時代(19世紀)

1個

高6.8、幅6.6、底(無釉部分)4.8、底(突起部分)5.6

関西系

M1587(平戸焼染付三閑人蓋置)

釉の光沢が強く、素地のガラス質も肥前のものより強めの印象を受ける。染付の色は鮮明である。唐子は型によって作られ、三人が背を向けて手を繋いでいる。陽刻による顔や衣装の表現は緻密である。台座には列点状の突起があり太鼓のようにも見える。茶道の蓋置きとして用いられたものであろう。(鈴田)



130. 焼締肩衝茶入 銘 無一物 やきしめかたつつきちやいれ めい むいちぶつ

桃山時代(17世紀初頭)

1口

高9.0、口径4.0、胴径7.2、底径4.5

信楽

M1418(信楽茶入 銘 無一文(如心斎) 牙蓋 掛物仕立 添文)

肩を直角に折りまげ、直線的な胴をもつ肩衝茶入。白粒が混じった黄白色の素地は橙色に焼ける。肩全体にビードロ釉を掛け、透明釉が一筋流れ、その部分に篋で幾筋か横線を入れ景色をつくる。胴の中央に一本の彫が回る。平底で中央に「三」の窯印が掘られている。京都三条の下白山町から肩衝茶入が出土しており、遺構の年代である元和頃の製作と考えられる。箱蓋裏に「シカラキ／茶入／無一物／左(花押)」と如心斎天然宗左(1705-53)の花押をもつ箱書があり、中川冬景宛天然宗左書状が添う。(岡)



131. 鉄釉茶碗 銘 閑居 てつゆうちやわん めい かんきょ

桃山時代(17世紀初頭)

1口

高10.0、口径10.3-10.8、底径4.5

信楽

M794(信楽茶碗 銘 閑居)

白石が多く混じる白い素地。茶碗の下半分を手びねり、上を回転台のロクロで仕上げた半筒型の茶碗。内底を深く削り、茶溜を作る。総体に鉄釉をかけ、正面に灰釉を流し掛けて景色とし、石ハゼも認められる。高台は丸い紐を付けたようで、縁が円形をなす。信楽は無釉の焼き締めだが、17世紀になると鉄釉も認められ、京都三条の福永町から同種の茶碗が出土している。遺構の年代から元和頃の製作と考えられる。箱の蓋のみが残り、裏に「シカラキ／茶碗／銘／閑居／左(花押)」と覚々斎(1678-1730)の花押がある。内箱蓋裏には「シカラキ／茶碗／覚々箱書付／銘閑居／左(花押)」と即中斎(1901-79)外箱蓋裏に「信楽茶盃／覚々斎書付／銘閑居とあり／無適宗也」と無適斎久田宗也(1925-2010)が箱書する。(岡)





やきしめやはずぐちみずさし
132. 焼締矢筈口水指

桃山時代(17世紀初頭)

1口

高15.7、内径9.6-11.4、胴径18.4、底径17.5

信楽

M1202(古信楽水指)

素地は白石を多く含んだ黄白色で、橙色に明るく焼ける。底から台形状に立ち上がった胴の上部を内側へ折り込むが、その幅は広く上から三分の一のところで折線がつく。口縁は広くとられ、摘まみのついた共蓋が沿う。側面には石はぜが、底には円形の重ね跡が認められる。内側に「竹」の掘銘があり、京の糸割符商、有来新兵衛の旧宅跡から、享保年間(1716-36)に出土したと言われる信楽水指のひとつであろう。三条の弁慶石町から類似した水指が出土しており、遺構の年代である慶長後期の製作と考えられる。(岡)



やきしめやはずぐちみずさし
133. 焼締矢筈口水指

桃山時代(17世紀初頭)

1口

高17.7、口径17.5×18.5、底径17.6

信楽

M1182(古伊賀水指)

白石を多く含んだ褐色の素地で、楕円の底をつくり、回転台をもちいて紐土巻き上げて胴を成形し、胴の上部を内に折り込んで矢筈口形とする。片側面を手で押さえて歪みを作り、胴の上と下の周囲に篋目を彫りこむ。側面に黒釉を上から流れ掛けして景色を作り、石ハゼも認められる。作意の強い水指である。内面の底左側に「×」の窯印が残る。底には土の盛り上がりがあり、指跡も数カ所残る。京都三条の下白山町から同種の矢筈口の水指が出土しており、遺構の年代である元和頃の製作と考えられる。箱蓋裏には赤漆で「信楽水指 左(花押)」と、碌々斎瑞翁宗左(1837-1910)が箱書している。(岡)



やはぐちさんぞくみずさし
134. 矢筈口三足水指

桃山時代(17世紀初頭)

1口

高16.6、口径18.0-20.0

信楽

M1200(信楽三足水指)

白石を多く含んだ黄白色の素地で橙色に焼ける。楕円の底をつくり、回転台をもちいて紐土巻き上げて胴を成形し、胴の上部を内に折り込んで矢筈口形となし、底に三足を貼り付ける。共蓋がつくが、大きさが合わない。蓋合わせの部分に篋で筋を彫り込み、内面の底左側に「三」の窯印が掘りこむ。底中央に灰跡が認められる。作意の強い造形で、京都三条の下白山町から矢筈口の水指が出土しており、遺構の年代である元和頃の製作と考えられる。箱蓋裏には赤漆で「信楽水指 左(花押)」と、碌々斎瑞翁宗左(1837-1910)が箱書している。(岡)



やしめてつきはないれ
135. 焼締手付花入

桃山時代(17世紀初頭)

1口

高22.8、胴径9.0、高台径9.0

信楽

M1267(古信楽手付花入)

紐状の把手をつけた筒型花入。白石の多く混入した白土が橙色に明るく焼け、石ハゼも認められる。紐土巻上げの回転ろくろ成形で、表面は丁寧に撫でられるが、裏面は轆轤目が強く残る。外面は無釉だが、内面は灰釉を掛け、水漏れを防いでいる。三条の瀬戸物屋によって仲介されたと思われ、元和頃の製作であろう。箱蓋表に「手附／花入／信楽／六代／是心軒(花押)」、蓋裏に「贈錦織氏エ／古信楽／六代／是心軒(花押)」とある。是心軒一路が創流した松月堂古流家元の箱書と考えられる。(岡)



136. 焼締蓋置^{やきしめふたおき}

桃山時代(17世紀初頭)

1口

高5.0、径4.1-5.0

信楽

M1374(伊賀蓋置)

白石を含む白土の素地で、橙色に明るく焼ける。タタ板を円柱に丸めて端をつけた蓋置で、石ハゼが入る。製作年は判然としないが、おそらく17世紀初頭と考えられる。(岡)



137. 鉄釉文字彫文陶硯^{てつゆうもじほりもんとうげん}

江戸時代(18世紀)

1面

高最長2.1、縦19.8、横16.7、径8

丹波か

M2343(古丹波 陶硯 文字彫)

方形の本体の中央に径8cmほどの円形の掘り込みを設け、墨池と墨堂を形成しており、全体に薄く鉄釉が掛けられている。右脇縦に「妙法」円面上方に「秋」、同左やや上に「月」、同右下に「瀧」の文字が配置されている。文字は、緻密な胎土に、行書体を思わす軽やかな筆致で深く彫り込まれている。また、鋭く彫り込まれた円面は、満月にもみえる。月は、静寂の象徴としてその輝きで人々の心を清めたとされ、趣のある取り合わせとなっている。ただ、限られた文字で情景を連想させるのは比較的新しい趣向である。全体に僅かな反りが認められる。(仲野)



138. 色絵豊干図隅切皿^{いろえぶかんずすみきりざら}

幕末-明治時代(19世紀後半)

1枚

高4.5、幅33.4×25.6、底幅14.9×22.5

三田

M1485(九谷焼豊干に虎図長方皿)

虎に乗るなどの奇行で知られる、唐代の禅僧豊干(ぶかん)を描く。緑・青・紫の濃厚な上絵付から、石川県で作られた九谷焼に見えるが、磁器である九谷焼は、胎土が堅く緻密であるため、釉薬に小孔(ピンホール)が生じない。しかし本作は陶器であるため、胎土が粗く釉薬を吸い込み、釉薬の表面に小孔が生じている。このような特徴は、幕末から明治時代にかけて陶器製の九谷写を多数制作していた、三田焼志手原(しではら)窯の製品に見られる。

箱蓋裏墨書「九谷焼／豊干に／虎図／皿」、箱蓋裏貼紙「(朱文楕円印「淡／如水」)」(梶山)





せいじざるしかかちょうずこざら
139. 青磁猿鹿花鳥図小皿

江戸時代(19世紀)

6枚

高2.4-2.6、口径10.9、底径4.7

三田もしくは王地山

M1455(青磁猿鹿花鳥図 小皿)

三田城下の商人神田惣兵衛が、寛政11年(1799)に創業した三田焼の三輪明神窯跡、および惣兵衛が文政11年(1828)に三田焼の技術を導入して、篠山城下に開いた王地山焼窯跡から、この皿の土型が出土している。中国で猿は、「猿猴」の猴(コウ)と、領主・大名を表す「公」の音が通じ、鹿は俸禄・金を示す「録(ロク)」と音が通じることから、この図には、領主に上り詰め裕福になるという吉祥的な意味が込められている。うちの1枚が重さ139g。(梶山)



はくじかめがたこざら
140. 白磁亀形小皿

江戸時代(19世紀)

6枚

高3.2、口径7.5×12.1、底径6.2×4.9

三田もしくは王地山

M2220(平戸焼白磁亀小皿 8客)

型成形・型施文により、甲羅の後方に藻が生えた長寿を象徴する「蓑亀」を象った小皿。青磁の類例が三田焼や王地山焼に確認でき、土型も窯跡から出土しているが、本作の底裏は平らで脚が付かず無釉にしている点と、藻が長い点が、三田焼・王地山焼とは異なる。蓑状の藻は、持ち手とするために長く改変したものか。三田焼・王地山焼の型自体が流通し、他窯で用いられた例も確認できるが、現段階では三田焼か王地山焼としておく。うちの1枚が重さ37g。(梶山)



いろえきんさいたいこうごう
141. 色絵金彩太鼓香合

おくだもくはく
奥田木白

江戸時代(19世紀前半)

1合

総高5.8(身2.0)、口径4.2×3.1、幅5.3×4.4 二脚

赤膚

M1496(赤膚焼太鼓形香合)

太鼓の環(かん)を上にして台座に横向きに置いた形の香合。胴中央の菊坐と環、皮を押さえる鉾などがやや誇張気味に表現されている。胴部の木目調の文様、鼓の巴文など、赤、青に金彩を加えて表現している。やや黄褐色気味の緻密な胎土が用いられ、薄手に仕上げられている。香合の上下接する部分と底部を除き全面施釉。「赤膚焼」印「木白」円形二重枠印、箱蓋表「太鼓香合／赤膚山印／木白造／丸印」。



赤膚焼(奈良市五条町)：大和郡山藩主柳沢堯山(ぎょうざん)が1800年頃、「赤ハタ」印を陶工治兵衛に下賜したとされる。一時衰退するが、幕末の名工奥田木白(1800-71)により、多くの写し物の茶陶が焼かれている。(仲野)



142. 赤楽茶碗

徳川齊順・紀州徳川家十一代藩主
江戸時代(19世紀)

1口

高8.3、口径10.3、胴径11.5、底径5.6

紀州

M590(赤茶碗)

手捏ねで比較的薄手に仕上げられた赤楽茶碗。口縁端部には、篋削りが入り、飲み口と景色となっている。腰下部や胴部の四か所に外側から、強く押さえられており、碗の内側にはみ出している。少し幅広い高台であり、底部中央に径1.9cmの円形枠内に葵紋が認められる。全面施釉されており、発色の良い赤楽である。畳付に線状の目跡が二か所認められる。齊順は、文政十三年(1830)から天保十五年(1844)の間に四回にわたり、和歌山城西の丸および別邸湊御殿内の清寧軒にお庭焼を開いており、この時期の制作と推測される。また、箱書きにある「金城主人」は尾張藩十二代藩主徳川齊荘(襲封天保十年・1839三月)が銘としており、制作年を考える参考となる。ただ、葵紋の印影が不鮮明なことや、「金城主人」銘に花押が伴わない点など、さらに精査が必要である。底部中央に葵紋押印銘。箱蓋表「紀伊重相君御柝／尾張重相君御筆／赤茶碗／□法老人花押」、箱蓋裏「紀伊齊順作／金城主人」。(仲野)



143. 柘榴香合

江戸時代(19世紀前半)

1合

総高5.3、口径3.4、底径2.5

射和万古

M1437(射和万古焼 柘榴香合)

果皮の一部が裂け、熟した実をみせる柘榴をかたどった香合。底部及び合わせ目を除く全面に施釉されており、果皮は黄褐色、三枚の葉は緑である。実は白地に正臙脂を用いて象徴的に彩色されている。柘榴は、鬼子母神の象徴として吉祥果とされる。底部に五弁花柝「射和」印。(仲野)

射和万古焼(三重県松坂市)



144. ^{しのちやわん}志野茶碗

桃山時代(16世紀末)

1口

高8.7、口径12.8-13.5、底径6.8

美濃

M792(志野茶碗 銘 鵬)

僅かに外反する口縁部からほぼ真つぐ腰部にいたる大振りの茶碗。腰下部に力強い篋削りの線が波打っている。高台は低めであるが幅広く変化している。側面の文様は大きく三分され、橋、草花文、亀甲繋ぎ文が太い筆により闊達に描かれている。長石釉の濃淡により、口縁端部や釉境など、ほんのりと赤みを帯びている。底部土みせは高台を囲むように広く三角形に残されている。高台内に鋭利な篋先による「大」の刻銘がある。(仲野)

外箱蓋覆紙墨書「志野／銘『鵬』」

内箱蓋表墨書「志野茶盃／鵬／守一記」

風呂敷墨書「志野茶盃／銘 鵬」



145. ^{しのひえんこうごう}志野飛燕香合

桃山時代(16世紀末)

1合

総高3.0、径4.2×4.2、底径2.5

美濃

M1520(志野飛燕香合)

隅丸方形の香合。上面に二羽、相対する両面にそれぞれ一羽の燕、逆の両面に幾何学文が鉄絵付されている。内面の一部を除いて長石釉が掛けられている。細く削り出された輪高台の一部に熔着痕が認められる。燕は、常盤の国を往来する玄鳥で、縁起の良い鳥とされる。(仲野)



しのよほうむこうづけ
146. 志野四方付

桃山時代(16世紀末)

1口

高4.9、口径7.8、底径6.3

美濃

M1408(志野四方茶器 シマ柿蓋)

隅丸四方向付。薄く立ち上がる口縁部の直下で僅かに膨らみ、胴部のなかほどで膨らみをみせ底部にいたる形。厚めの長石釉が全体に掛かり、側面の檜垣文などもはっきりと確認できない。浅い碁笥底であり、内側に三点目跡が認められる。(仲野)



しのむこうづけ
147. 志野向付

桃山時代(16世紀末)

1口

高7.9、口径7.2×7.0、底径7.2

美濃

M1435(志野あやめ絵茶碗 香合)

轆轤成形の後、隅丸方形に変形された深めの向付。玉縁の口縁部直下で僅かに膨らみを見せるが、その後は穏やかに拡がり底部にいたる。胴部中央より少し下がった部位に胴紐が廻る。高台は低く輪高台。高台内に輪トチ痕が認められる。文様は、象徴的に描かれたあやめの花と草文が交互に面を変えて描かれている。高台及び底部を含む全面に薄めで比較的安定した長石釉が掛けられている。文様の集まる部分や釉の薄い部分などに緋色がでており、文様部分には焦げの認められる部位もある。(仲野)



しのふかむこうづけ
148. 志野深向付

桃山時代(16世紀末)

1口

高8.1、口径6.2×6.2、底径3.1

美濃

M1413(志野四方茶器 杜若 面高文 鉄刀木蓋)

隅丸四方深向付。轆轤を用い円筒形の祖形を成形の後、上半部を中心に隅丸方形に仕上げられている。正面に杜若、他面に沢瀉、檜垣文が描かれ、鬼板、長石釉ともに発色は良好。見込み、底部、腰部の一部に無釉部分がある。底部は碁笥底で目跡が三か所認められる。上半部を中心に大破しており、金直しされている。茶器として使用された。(仲野)



しのふかむこうづけ
149. 志野深向付

桃山時代(16世紀末)

1口

高7.8、口径6.0×6.0、底径4.2

美濃

M1414(志野茶器 杜若 面高文 黒柿蓋)

隅丸四方深向付。轆轤を用い円筒形の祖形を成形の後、上半部を中心に隅丸方形に仕上げられている。M1413より一回り小さくほぼ同意匠。杜若の描写にやや精彩を欠く。(仲野)



150. 志野四方鉢

桃山時代(16世紀末)

1口

高6.9、口径11.6×11.7、底径8.5

美濃

M1344(古志野絵付四方鉢)

入隅四方向付。轆轤成形の後、型を用い薄手に仕上げられている。鉄絵は暗褐色の発色で、遠望する山並みと樹木が正面に、他面には草花や斜合格子などが描かれている。全体にやや厚めの長石釉が掛けられており、濃淡により緋色が認められる。底部に四か所(円形)、見込みに四か所(針状)の目跡が認められる。(仲野)



151. 黒織部茶碗 銘菱餅

桃山時代(17世紀初)

1口

高6.8、口径10.6-14.0、高台径5.9

美濃

M546(黒織部茶碗 銘菱餅)

ロクロ水挽き成形の後に、指や篋によるナデやケズリをほどこし、大きく変化を加えている。器形は高台から斜めに立ち上がり、腰部で折れて胴部は垂直気味に立ち上がる。胴部は指で押さえて楕円あるいは不整四方形に大きく変形させ、口縁部は山路状とする。胴部中央に横方向の篋調整を加え、段をつくっている。「引き出し黒」の効果を活かした漆黒色の鉄釉を掛分けし、外面の一箇所に余白部分を配し、長石釉を掛けている。その余白部分には菱形文はほぼ中央で区切り、黒白で片身替りとしている。文様は、余白部分には菱形文を6つ配しているが、やや大きさにばらつきがあり、描き方は丁寧とは言いがたい。また、黒釉の部分に帯状の余白を作っているが、これは紙などを貼り付けた、いわゆるマスキングの手法によるものである。底部高台外側に「中」のような形の刻文を配している。(荒川)

箱蓋覆紙「佐助作／黒織部／茶盃／菱餅ト号」

箱蓋表「おりへ／沓／織部／□□」

箱蓋裏「佐助／黒織部／銘菱餅／守一記／九十三才」

風呂敷「十作／佐助／黒織部茶盃／雛祭り」



くろおりべちやわん めい どうじんがき
152. 黒織部茶碗 銘 唐人笠

桃山時代(17世紀)

1口

高6.7、口径最短10.2、口径最長14.6、高台径最長6.4

美濃

M560(黒織部茶碗 銘 唐人笠)

ロクロ水挽き成形の後に、指や窺によるナデやケズリをほどこし、大きく変化を加えている。器形は高台から斜めに立ち上がり、腰部で折れて胴部は垂直気味に立ち上がり、口縁は太い縁帯状をなしている。胴部は指で押さえて楕円あるいは不整四方形に大きく変形させ、口縁部は山路状を呈している。胴部の上半には横方向に窺調整を加え、縦方向に窺による二重沈線を一箇所に入れている。「引き出し黒」の効果を活かした鉄釉を掛分けし、外面の二箇所に余白部分を配し、長石釉を掛けている。その余白部分の一方に鉄絵で抽象的なモチーフを配し、他方は余白のままとする。文様は写実的な意匠ではなく、かなりデフォルメされデザイン化された意匠と判断される。何かをぶら下げたような文様にも見え、あるいは魔除けのため勸請吊をイメージしたものかとも推測される。底部高台内には「U」形の刻文を配している。(荒川)

箱蓋表「天正時代／黒織部／茶盃」

箱蓋裏「銘／唐人笠／七十八翁／春泰 証(白文円印)」

「春泰」

箱側面貼紙朱文楕円印「淡／如水」墨書「唐人笠」

風呂敷「黒織部茶盃／唐人笠」



くろおりべちやわん めい すみだがわ
153. 黒織部茶碗 銘 隅田川

桃山時代(17世紀初)

1口

高6.5、口径10.2-14.0、底径6.0

美濃

M806(黒織部茶碗 銘 隅田川)

ロクロ水挽き成形の後に、指や窺によるナデやケズリをほどこし、大きく変化を加えている。器形は高台から斜めに立ち上がり、腰部で折れて胴部は垂直気味に立ち上がり、口縁は縁帯状をなしている。胴部は指で押さえて楕円あるいは不整四方形に大きく変形させ、口縁部は山路状を呈している。胴部の上半には横方向に窺調整を加え、縦方向には二箇所に窺を入れている。「引き出し黒」の効果を活かした漆黒色の鉄釉を掛分けし、外面の二箇所に余白部分を配し、長石釉を掛けている。その余白部分の一方に鉄絵で四方形の幾何学文を配し、他方は余白のままとする。内面には掻き傷が残る。文様は、四方形の半分で区切って左側に格子目、右側には枠内に列点を配している。木村氏はこの文様を屋形船に見立て、「隅田川」の銘を伏したものである。この幾何学文のモチーフの詳細は不明であるが、左隅に何かに掛けたような表現があり、ぶら下げたものとも見える。このような幾何学な意匠は黒織部茶碗には多く見受けられる。底部高台内には「V」形の強い刻文を配している。(荒川)

箱蓋表「古織部焼沓□」貼紙「(朱文楕円印「淡／如水」)」

箱蓋裏「孝美作／銘／隅田川／守一□」

箱側面「織部焼／沓□」

風呂敷「孝美／黒織部／茶盃／『隅田川』／守一銘」



154. 黒織部茶碗 銘 クロ木

桃山時代(16世紀後半)

1口

高8.2、口径10.7-13.4、高台径5.5-5.9

美濃

M819(黒織部茶碗 銘 クロ木)

ロクロ水挽き成形の後に、指や篋によるナデやケズリをほどこし、大きく変化を加えている。器形はやや深めの半筒形碗で、高台から斜めに立ち上がり、腰部で折れて胴部は垂直気味に立ち上がる。胴部は指で押さえて楕円あるいは不整三角形に大きく変形させ、口縁部は緩やかな高低さをつけた山路状となる。胴部には縦方向への大胆な篋調整を加え変化をつけている。「引き出し黒」の効果を活かした漆黒色の鉄釉を内外面にほどこし、外面には型紙でマスキングして花菱文を二つと「二」のような文様一つを配し、そこに長石釉を掛けている。底部高台内には「×」形の刻文が配されている。(荒川)

外箱蓋表「茂右衛門黒茶碗／銘クロ木／箱書宗旦／□□鑑(花押)」

内箱蓋表「クロ木／関戸□(花押)」

風呂敷「六作／茂右衛門／黒織部茶盃／宗旦銘／「クロ木」



155. 黒織部輪繫文茶碗 銘 五月雨

桃山時代(17世紀初)

1口

高7.1、口径10.1-13.3、底径6.0

美濃

M1139(黒織部茶碗 銘 五月雨)

ロクロ水挽き成形の後に、指や篋によるナデやケズリをほどこし、大きく変化を加えている。器形は高台から斜めに立ち上がり、腰部で折れて胴部は垂直気味に立ち上がり、口縁は縁帯状をなしている。胴部は指で押さえてほぼ三角形に大きく変形させ、上半には横方向に篋調整を加え、縦方向には二箇所を篋を入れている。漆黒色の鉄釉を掛分けし、外面余白の部分に丸文を鉄絵で描き、その上に長石釉を掛けている。焼成中に窯から引き出し鉄釉を漆黒化させた、いわゆる「引き出し黒」の効果を活かして呈色し、内面には焼成中に引き出した際の掻き傷が残る。文様は、丸文を五つ連ねている。丸は太い圈線の内側に細い線を二重に入れ、なかに対角線を交差させている。矢の的のようにも見え、あるいは車輪の意匠化されたものにも見える。底部高台内には「T」形の刻文を配している。(荒川)

箱蓋表「黒オリベ茶盃／銘／五月雨／守一誌」

箱蓋裏「新兵衛作／七十七翁 春泰証(黒文円印)「春泰」

風呂敷「新兵衛／黒織部茶盃／五月雨」



くろおりべちやわん めい しほがき
156. 黒織部茶碗 銘 柴垣

桃山時代(17世紀初)

1口

高6.6、口径10.2-13.6、高台径6.0-6.3

美濃

M1140(黒織部沓茶碗 銘 柴垣)

ロクロ水挽き成形の後に、指や篋によるナデやケズリをほどこし、大きく変化を加えている。器形は高台から斜めに立ち上がり、腰部で折れて胴部は垂直気味に立ち上がり、口縁は縁帯状をなしている。胴部は指で押さえて楕円あるいは不整長方形に大きく変形させ、口縁部は山路状を呈する。胴部の横方向に篋調整を加え、縦方向に篋による太い沈線を数箇所に入れている。「引き出し黒」の効果を活かした漆黒の鉄釉を掛分けし、外面の二箇所余白部分を配し、長石釉を掛けている。その余白部分の一方に鉄絵で抽象的なモチーフを配し、他方は余白のままとする。内面には焼成中に引き出した際の掻き傷が残る。文様は、何らかのモチーフを写実的に描いた具象文とは考えられず、かなりデフォルメされデザイン化された意匠と判断されよう。丸に尻尾を付けたように見える意匠は龍の文様であろうか？底部高台内には「×」の太い刻文を配している。(荒川)

箱蓋表「柴垣」

風呂敷「×印／沓茶盃／黒織部／柴垣」



おりべちやわん めい からはし
157. 織部茶碗 銘 唐橋

桃山時代(17世紀初)

1口

高6.8、口径13.3×10.6、底径5.7

美濃

M811(織部茶碗銘 唐橋)

沓形茶碗。口縁部が波打ち、口縁下部で絞りが入るが、また拡がり腰部にいたる。腰下部には面ごとに強弱の異なる沈線が横に走る。全面に錆釉が掛けられており、薄めの長石釉により赤みが生じ、いわゆる鳴海風の作行となっている。側面には、縦に走る細線の反復文様と濃淡の長石釉が景色を作っている。口縁部の内外面に緑釉が流し掛けられているが、一部還元のため赤味を帯びた部分もある。高台は低く幅広く糸切り痕を残している。高台内に「×」篋彫。(仲野)

箱蓋裏「ヲリヘ／茶碗／銘唐橋／左(花押)」(十二世惺斎宗左)墨書



あかおりべちやわん
158. 赤織部茶碗

桃山時代(17世紀初)

1口

高5.5、口径16.3、底径5.5

美濃

M544(赤織部平茶碗 銘 芦雁図 すすき)

腰部からはほぼ真つすぐ口縁端部へ開く平茶碗。高台部を含む全面に、長石釉が薄く掛けられており、穏やかな赤色が上手く発色している。見込み全体に、近景の芦と遠景の二羽の鳥がゆったり飛ぶ姿が穏やかな筆致で、白化粧土と鬼板を用いて描かれている。高台内には兜巾が削り出されており、高台外側脇に目跡が認められる。(仲野)

箱蓋覆紙墨書「赤織部 平茶盃／芦雁図」

風呂敷墨書「赤織部／平茶盃／芦雁図」

風呂敷付木札墨書「赤織部／葦之絵」



みの いが そうじみずさし めい しおがま
159. 美濃伊賀双耳水指 銘 塩竈

桃山時代(17世紀初)

1口

高12.3-12.7、口径13.4×11.3、幅15.1-15.5 三脚

美濃

M1187(美濃伊賀耳付水指 銘 塩竈)

轆轤成形された祖形の胴部などを強く変形させており、口縁部は半円に近い形状となっている。やや開き気味の口縁部から頸部を経て、平らに面取りされた肩部に続き、僅かに開きながら底部にいたっている。糸切痕の残る平底に、団子状の三脚が伴う。双耳は、肩部に乗るような状態でやや上向きに横耳が取り付けられている。胴部中央には、二本の沈線が力強く廻っている。濃い発色の緑釉と鉄釉が線状に流れ落ち、二面に長石釉が流し掛けられている。内面底部に輪トチ状の目跡の他、緑釉の落下が認められる。底部に「塩カマ／花押」(十二世惺斎宗左)朱漆書。

箱蓋裏「伊賀焼／耳附水指／銘塩竈／左」墨書。(仲野)



160. 美濃伊賀双耳花生 みのいがそうじほなけ

桃山時代(17世紀初)

1口

高27.9、口径9.8×9.2、底径11.8

美濃

M1264(美濃伊賀花生)

轆轤水挽により祖形が成形され、口縁部と胴部を強く押さえることにより、全体が隅丸三角筒状になっている。内側に折り返した幅広い口縁部から細い頸部へつながる。頸部のやや下に竹節を思わす深い沈線が横に走る。肩部で僅かに膨らみ、胴下部へいたる。肩部から胴部なかほどまで不規則な沈線が横に繰り返して走る。頸部中頃から肩部にかかるように、粘土紐による縦耳が相対的に設けられている。耳の中央には縦に沈線が彫り込まれている。肩から腰部へ幅広い篋削りが認められる。口縁部から鉄釉の線状の流し掛けが二か所と、やや不透性の長石釉が幅広く掛けられており、長石の吹き出しも認められる。底部は平底で糸目を残し、楔状の窯印が三点並んでいる。掛け花としての使用も見込んで制作されている。(仲野)



161. 織部香合 おりべこうごう

桃山時代(17世紀初)

1合

総高3.2、内径3.9-4.1、幅5.3-5.8、底径4.0-4.2

美濃

M1508(古織部ヤキメシ香合)

全体は角のとれた三角形に近い形状であるが、表面は大胆な篋使用で、立体感がある。底面に沿ってやや不整形の輪高台が認められる。鮮やかな緑釉の掛けられた部分と、手早く鉄絵付された芦状の線文の部分とに分かれる。内面にも薄く長石釉が掛けられている。(仲野)



しのたんぽぽもんよほうむこうづけ
162. 志野蒲公英英文四方向付

桃山時代(17世紀初)

1口

高5.9、口径16.2×15.8 三脚

美濃

M1330(古志野蒲公英絵菓子器)

轆轤水挽成形後、隅丸四方に変形させている。小鉢状の肩部から口縁部に向け大きく開き、端部は内側に折り込まれている。底部には、紐環足を三か所付けている。内面底部には、蒲公英が大きく描かれ、内側面は大きく四区画され、網代文を中心とする区画と小区画が連続して一単位となる草文の区画が交互に連なる。口縁部も四区画され、編籠様の文様と草花文が交互に連なっている。全面施釉された長石釉は良く熔けており鉄絵が鮮明である。底部には紐環足が三か所、見込に三点の目跡が認められる。

蒲公英文は、例が少なく他に京都市考古資料館(京都市上京区室町通樺町下ル大門町出土資料)蔵と愛知県陶磁美術館蔵の二例知られる。

紐環足：粘土紐による環状に作られた脚。(仲野)



おりべひらむこうづけ
163. 織部平向付

桃山時代(17世紀初)

5客

高3.8-4.9、口径13.7×10.2 三脚

美濃

M1478(織部向付)

型打ち成形による平向付。見込に布目が認められ、底部には紐環足が三か所施されている。全体を斜めに三分割し、中央の帯状部分に梅花文や三重線による三連の小山状の文様などが鉄絵付され、長石釉が薄く掛けられている。両翼には緑釉が掛けられており、外側面には、簡略化された草文が認められる。

織部平向付：多くの平向付は、タタラ定規で作られた粘土板を用いて型打ち成形されている。その形は極めて多様で、州浜、片袖、重ね菱、山形などの他、数百種あるとされる。また底部には、粘土紐で作られた三脚が伴うが、底部の中央から、三方向へむけた放射線に沿う形で付けられるのが一般的である。また、粘土紐を使った脚をその形状から紐環足と呼んでいる。(仲野)



164. 織部平向付^{おりべひらこうづけ}

桃山時代(17世紀初)

5客

高4.5-4.7、口径15.0×9.9 三脚

美濃

M1479(織部向付)

型打ち成形による平向付。他の四点と異なる山形が一点含まれる。底部には、紐半環足が三か所、見込みには目跡が三か所認められる。全体が斜めに三分割され、中央の帯に梅花文が散らされ薄く長石釉が掛けられている。両翼には緑釉が掛けられており、外側面には簡略化された草文が描かれている。(仲野)



165. 絵志野水注^{えしのすいちゅう}

桃山時代(17世紀初)

1口

高8.7、口径12.1、幅21.7×17.8 三脚

美濃

M1233(絵志野銚子水注)

轆轤水挽された体部は、肩が張り、腰へと丸味を帯び、穏やかな丸底となり、団子状の三脚を伴う。銚子を強く意識した形で、類例は少ない。肩部に穴(一穴)をあけて注口部を取り付けており、注ぎ口は逆三角形に近い形である。把手と蓋は失われており、金属製で補われている。胴部を中心に花唐草文と檜垣草花文が鉄絵付されており、口縁部の一部を除く全面に長石釉が掛けられている。釉の厚い部分は鉄絵が青味を帯びて見えるところがある。底部には三点の目跡が認められるが、見込みには、重ね焼きの窯道具痕が認められない。また替蓋として青花五彩人物図蓋(天啓赤絵)が伴う。水注の口径に合わせて縁を削り、鈕は金属製の茄子が取り付けられている。(仲野)



166. 志野織部手鉢^{しのおりべてばち}

桃山時代(17世紀初)

1口

高12.4、口径20.5×20.2 四脚

美濃

M1337(志野織部巻物絵角手鉢)

型打ち成形された薄手の方形の体部に、対角線に沿って把手が付けられている。把手は幅広く中央・左・右に各一本、平行した沈線が施されている。底部には紐環足が四か所認められる。見込中央、把手の真下に重なるように大きく巻物と紐、片隅に丸文が描かれている。体部外側面の鉄絵には一般的な暗褐色の他にやや赤みの有る暗褐色の二種類がある。(さらに瀬戸赤楽が加わる例もある)緑釉は筆先で垂らしかける手法が特徴的であり、弥七田織部と呼ばれている。(仲野)



しのまるざら
167. 志野丸皿

江戸時代(17世紀前半)

5枚

各 高2.8、口径13.0-13.2、高台径7.5-7.8

美濃

M1521(古志野無地込五枚)

轆轤成形された丸皿。見込に三点目跡、高台内に輪トチ跡が認められる。全面に長石釉が、ほぼ均一に掛けられている。個体差があり、時期差が認められる。(仲野)



かいゆうちようほうけん
168. 灰釉長方硯

江戸時代(17世紀中-18世紀初頭)

1面

高3.9、縦19.8、横15.0

美濃

M2354(陶硯)

やや縦長の板状の陶製硯。背面を深くえぐり取り、墨を溜める部分を裏から貼り付けて袋状の墨池を成形している。表面は、陽刻文と共に型成形されたと考えられ、墨池と墨堂はほぼ1対3ほどに区分されている。墨池の上面は格狭間風であり、すった墨が墨池へ流れ落ちる落潮は細く絞り込まれている。背面を除く全面に長石を少し多めに含み白濁気味の灰釉が掛けられているが、墨堂部分には薄く均一に施釉されている。(仲野)



さんきやくつぎつがた
169. 三脚付筒形トチ

江戸時代(18世紀)

1軀

高5.5、口径5.8、胴径7.8 三脚

美濃か

M1429(美濃伊賀蓋置 銘 三人形)

轆轤成形により、底部から一旦外へ開き、続いてやや内傾しながら引き上げており、口縁部はなで調整により平坦に仕上げられている。底部は、篋で削り取られ、三角錐状の三脚が付けられている。細かな胎土で乳白色であり器面には薄く自然釉が掛かっている。丸碗や片口鉢などの焼成に使われた窯道具である。茶会記では美濃伊賀蓋置と記載されている。(仲野)

箱蓋表墨書「美濃伊賀／蓋置」

箱蓋裏墨書「銘／三人形／守一記」

風呂敷墨書「美濃伊賀／蓋置／銘三人形」



170. ^{ふた}蓋

江戸時代(18世紀)

1枚

高2.3、径10.7、底5.4

瀬戸もしくは美濃

M1402(美濃伊賀灰皿 銘 水玉(定三))

小・中形の壺形容器の蓋。底部から朝顔状に開き、中央に鈕のある落とし蓋。底部は糸切のまま無調整。表面には薄く灰釉が掛けられており、部分的に飴釉が認められる。茶会記には、美濃伊賀灰皿と記載されている。(仲野)

風呂敷墨書「合利形／煙草盆／菊花入／水玉灰皿」

171. ^{てつえたかざごもんむこうづけ}鉄絵高砂文向付

幕末・明治時代(19世紀末-20世紀)

5客

高4.1、口径17.8×13.3 三脚

瀬戸もしくは美濃

M1475(織部焼高砂向付)

長方形の体部の対角方向が隅切りされ、色分けすることにより、重なっているように見せている。「高」「砂」の文字が大書され、老夫婦、笹文などが濃淡の鉄彩料を用いて描かれている。老夫が熊手、老婦が箒を持つ高砂図と考えられるが描写は稚拙で判然としない。底部に長方形の無釉部分があるが、紐環足はその辺に沿って平行に付けられている。

『北斎漫画初編(一卷)』文化11(1814)年では、最初に高砂の絵が大きく掲載されており、当時の嗜好がしのばれる。(永田生慈監修『北斎漫画一』岩崎美術社、1986年)(仲野)



てつゆうかたつぎちやいれ めい や え が き
172. 鉄釉肩衝茶入 銘 八重垣

江戸時代(17世紀前半)

1口

総高7.7、高7.0、口径2.8、胴径6.5、底径5.0

瀬戸

M1416(瀬戸茶入 銘 八重垣 牙蓋 替袋8)

肩を大きく張った肩衝茶入。幅広く張った肩先からほぼ真すぐに大きな変化なく胴、腰下部にいたる形状。腰下端にそって斜めに削りを入れることにより平底が形成されている。底面には糸切痕が残る。口縁部から腰部まで黒色釉が厚めに掛けられている。腰部にいたるなだれは、まだらな部分と、さざ波が続くような一部規則的な流れが認められ、その釉際はやや褐色気味である。片桐家伝来の茶入れで、仕覆と牙蓋がそれぞれ八点付属している。替仕覆には、伊予簾、権太夫漢東、捻金モール、上代縞、古銀襦、古代段織錦、東山古金襦、紫地古金襦がある。(長崎巖「瀬戸茶入 銘八重垣 江戸時代・17世紀 付属の仕覆について」『愛知県美術館 研究紀要 第20号』2014年、平瀬礼太「木村定三コレクションM1416茶入 銘八重垣について」『愛知県美術館 研究紀要 第26号』2020年)(仲野)



はくゆうさぎがたてあぶり
173. 白釉兎形手焙

かとうしゅんう
加藤春宇

江戸時代(18世紀末-19世紀前半)

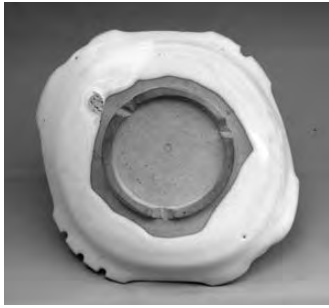
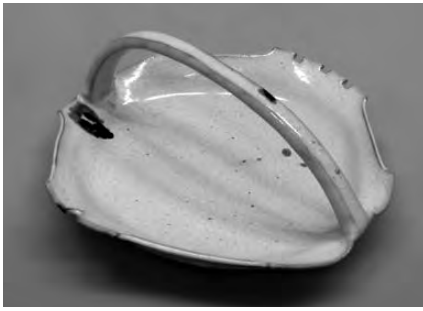
1軀

高17.7、幅21.5、奥行24.5

瀬戸

M1256(白兎手焙)

長石釉を掛けた兎形の手焙。祖形は型を用いて成形の後、目、耳、口、足、毛並みなど細かな表現を加えている。全体に厚手の成形で、背面に楕円形の穴が空けられ、灰、炭火などが納められ、手焙(小形の火鉢)とされた。目の表現は、オレンジ色の瀬戸赤楽とさらに鉄分の多い錆を用いて表現されており、その表情には真に迫るものがある。底部を除く全体に白釉が掛けられている。臥牛手焙や兎形屏風押さえなど、類似の作例が知られている。底部に「春宇」印銘。(仲野)



うのふゆうてつきはち
174. 鵜斑釉手付鉢

かとうしゅんたい
加藤春岱

江戸時代(19世紀前半)

1口

高12.5、径27.7×27.3、底径12.5

瀬戸

M1350(うのふ釉手付鉢)

白濁釉の掛かった手付の鉢。僅かに砂粒を含む淡褐色の素地が用いられており、輪高台の三方に三角形の切れ目を入れている。口縁端部には、不規則な刻みが入り、全体はやや菱形に近い形状である。口縁の対角線に沿って細いがしっかりとしたアーチ状の把手が付けられている。底部を除く全面に瀬戸地方で鵜斑と呼ばれる不透性の強い白釉が掛けられており、把手と口縁部に呉須が流れ落ちている。底部中央に小判形枠「春岱」印。(仲野)



おふけゆうひきごがたそうじはないれ
175. 御深井釉瓢形双耳花入

江戸時代(19世紀前半)

1口

高23.8、口径3.6、胴径11.1-16.2、底径8.2

瀬戸

M1265(御深井瓢形刻雲文花入)

球体を重ね双耳を付けた花入。やや大きさの異なる球体を重ね長めの口頸部をつけ、球体をつなぐように龍の双耳が付けられている。体部には丸のみで浅く雲文が彫られており、雲龍の吉祥文となる。輪高台の端部を除き、褐色気味の御深井釉が掛けられている。(仲野)



おふけゆうてつゆうなが ちゃわん
176. 御深井釉鉄釉流し茶碗

江戸時代(19世紀前半)

1口

高6.8、口径11.3-11.5、高台径4.4

瀬戸

M545(銘 ひまわり)

体部下方の丸みが強く口唇部は僅かにくびれた碗。底部を除く、下半に御深井釉、上半に鉄釉が掛けられ内面に流れ落ちている。釉は見込に溜り結晶化しており、瀬戸では俗に金流しという。やや幅広い輪高台の左側に楕円枠「景次」印が認められる。景次印茶碗では、鉄釉を掛け口縁部内外に鶏斑釉を漬掛けした例が多く知られている。(仲野)

箱蓋裏墨書「景次作茶碗／銘／ひまわり／守一観」



てつゆうさるがたてあぶり
177. 鉄釉猿形手焙

江戸時代(19世紀)

1躯

高27.5、幅22.3、奥行24.5

瀬戸・美濃

M1257(美濃焼猿手焙)

猿が膝を抱えて座る形の手焙。袖無しの羽織が黒褐色の鉄釉で表現され、底部を除く全面に鉄錆釉が掛けられている。背面肩に穴が空けられ、灰、炭火などが納められ、手焙(小形の火鉢)とされた。(仲野)



ちやうせきゆうしきがわら
178. 長石釉敷瓦

江戸時代(18世紀)

1枚

下面縦・横25.5×25.4

瀬戸か

M1168(古志野敷瓦)

八寸敷瓦。上面より下面が7mmほど小さく作られている。全般に成形は丁寧に仕上げられており、緻密で重い胎土が硬く焼き締まっている。上面には安定した長石釉が掛けられている。裏面に「亀之丞(花押)」の墨書が認められる。(仲野)



179. 染付祥瑞文薄端花器

江戸時代(19世紀前半)

1口

高18.1、口径17.9、胴下部径8.3、底径6.3

瀬戸

M1260(祥瑞高葉杯形花器 銘 破れ傘)

末広がりの底部に、細身で長い胴部が立ち上がり、上端に浅く広く開く口縁部を伴う薄端花器である。底部と口縁部の比較から不安定さはぬぐえないが、花器の一つの形である。胴部には、雲龍文が龍巻状に染付されている。口縁部内面は、口縁に沿って文様帯が巡っており、放射状に八区画され、祥瑞文が染付されている。釉調、呉須の発色共に良好であり、初期の瀬戸染付磁器の優品の一つである。口縁部を中心に大破しており、金直しされている。底部に隸書体風の「文化年製」染付銘。その脇に杵無しの「尾張」刻印。(林屋辰三郎・他「花入 薄端」『角川茶道大辞典』角川書店、1990年)(仲野)

箱蓋覆紙墨書「加藤民吉作／在銘文化年製／祥瑞模様／高杯形花器／銘／破れ傘」

箱蓋裏墨書「銘／破れ傘／卒軒／定」

風呂敷墨書「在銘／加藤民吉／祥瑞模様／高杯形花器／銘／破れ傘」



180. 染付鶴波図花入

江戸時代(19世紀前半)

1口

高22.7、口径11.8、径15.1、底径8.4

瀬戸

M1270(安南風鶴波図花生)

ラッパ状に開く口頸部に球形の胴部が伴う花器。頸部、胴部に、縦の突帯文により区画されている。口頸部では、瓔珞文と飛鶴、胴部には青海波文が染付されている。高台端部を除く全面に透明釉が掛けられているが、釉薬、呉須共に発色はやや鈍く安南風の趣がある。M1260とは作調が大きく異なる。高台内にしのぎ削りが認められ、「文化年製」染付銘、楕円杵に「尾張」印銘が認められる。(仲野)



181. 染付祥瑞写皿

加藤民吉

江戸時代(19世紀前半)

1枚

高4.7、口径23.8×17.7、底径15.7×8.5

瀬戸

M1363(祥瑞皿)

型成形された変形皿。底部を除く全面に、亀甲・七宝・青海波地文による捻祥瑞文が染付されている。呉須、透明釉共に良好であり、技術の安定化が認められる。高台内に「五良大甫呉祥瑞 瀬戸民吉写之(花押)」の染付銘がある。祥瑞文は中国明代末期の青花の写で、瀬戸染付磁器に散見されるが、作品に「祥瑞写」と有るものの他は、「祥瑞文」とした。なお、同銘による例は、M1461の小皿の他、細向付、蓋付碗など多器種に及ぶ。(仲野)



182. 染付祥瑞写小皿

加藤民吉

江戸時代(19世紀前半)

5客

高3.2、口径12.9×9.3、底径7.8×4.8

瀬戸

M1461(祥瑞写染付小皿)

型成形された変形小皿。M1363と同意匠。(仲野)



183. 染付捻祥瑞文輪花鉢

川本半助(四代)

江戸時代(19世紀)

1口

高8.6、口径15.0、底径6.0

瀬戸

M1328(祥瑞写捻菓子鉢)

轆轤水挽成形により祖形を作り、型成形により体部にねじりを入れた鉢。口縁上端に向けて捻状のひねりが拡がり、十六弁の輪花鉢となっている。見込中央の円形枠内に牡丹文を配し、祥瑞地文二列と草花文一列が一組となり、捻に沿って五組描きこまれている。外面は、腰下部を圏線で区切って、余白が設けられ、ゆつたりと七宝文が描かれている。その上に口縁端部に向けて捻に沿って祥瑞地文が施されている。やや濃い目の呉須と透明釉は安定して鮮やかである。高台内中央に角福染付銘が認められる。なお、包紙に「美濃国可児郡小木村 庄屋川地幸三郎 組頭川地治兵衛」連名による村絵図が使われている。箱蓋表「模祥瑞／捻菓鉢／真陶園／半介製(印)」(仲野)



184. 染付捻祥瑞文輪花組鉢

川本半助(四代)

江戸時代(19世紀)

3客組

大 高11.6、口径20.2、底径8.3

中 高10.5、口径18.3、底径7.9

小 高 8.4、口径15.0、底径6.6

瀬戸

M1364(祥瑞写捻鉢)

轆轤で祖形を作り、型成形により、体部全体に捻を入れた、大・中・小三組の輪花鉢。意匠はM1328とほぼ同じ祥瑞文。高台内に菱形の角福染付銘。箱蓋表「祥瑞写／捻形三ツ組鉢／真陶園半助作／五助誌(朱印)」(仲野)



185. 染付瑞草文木具写大平鉢

川本半助(五代)

江戸時代(19世紀)

1合

総高16.7、(身)高10.4、口径24.8、高台径11.9、

染付銘1.9×1.9(二重枠)(蓋)高6.8、径22.5

瀬戸

M1357(千羽鶴蒔絵染付木具写大平鉢)

染付磁器の底部を除く外面に、蒔絵を施した木具写大平鉢。腰が張り口縁部の開いた身に、肩の張る蓋が伴う磁胎の内面に、霊芝(別名万年茸)や菖蒲などの瑞草が染付され、外面には、黒漆地に金蒔絵に一部銀、朱を加えて飛鶴が描かれている。城下で蒔絵されたと推定されるが、詳細は未詳である。箱書は現在の箱の底板として、はめ込まれている。共箱が傷みこれを更新する際に、蓋を底板として保存を図ったものと考えられる。多くの木具写では、外面全体が漆塗りされているが、本作は、底部は磁胎を残し染付銘を施している、少ない事例である。また、染付銘の「半」の上のはねが「八」の字状の作品には優品が多いとされている。箱蓋表(底板)墨書「千羽鶴蒔絵／染付焼木具寫大平／真陶園／半介製(朱印)」、染付方形二重枠内に染付銘「山半製」。(仲野)



186. 金襴手盃

川本半助(五代)

江戸時代(19世紀前半)

1口

高3.1、口径6.5、底径2.2

瀬戸

M1655(金襴手盃)

底部から僅かに膨らみをみせながら大きく開き口縁端部が外反する形状の盃。圈線文や銘などが染付され、主文様は赤絵金彩で表現されている。見込には、白磁地に赤絵と金彩による圈線で区画された内側に赤絵地に花文が金彩されている。外器面には赤絵地に金彩による花唐草文が全面に描かれている。瀬戸地域では、上絵付の事例は少なく、小品が多いが、川本半助や亀井半二の作品が知られる。高台内「大明成化年製」染付銘。

箱蓋表「金襴手盃／真陶園／半介製(朱印)」(仲野)



187. 染付龍文竹節形蓋置

清時代後期もしくは江戸時代(19世紀)

1口

高5.1、口径4.8、胴径5.3×5.4、底径5.1

中国・景德鎮窯もしくは瀬戸(愛知)

M1428(瀬戸染付竹節蓋置)

作品自体に生産地を示す銘はなく、箱蓋裏に表千家12代惺斎宗左(1863-1937)が瀬戸焼と極書を記す。江戸時代後期の瀬戸製の可能性もあるが、「新渡(しんと)」と呼ばれる、清時代後期の嘉慶(1796-1820)・道光(1821-50)年間の景德鎮窯で制作された、日本向けの茶道具である可能性が高い。実際に、嘉慶や道光などの年号が染付で記された蓋置も多数確認できる。惺斎と同時代の表千家の茶人岩井宗麟宛に表千家不審菴が発行した、箱書代金受取状が付属する。重さ88g。

箱蓋裏墨書「セト染附ノ竹ノ節ノフタ置ノ左(花押)」
添状「覚ノ一 金式千疋ノ但瀬戸染付竹ノ節フタ置ノ書付ノ右為御挨拶御恵投ノ被成下忝致受納候以上ノ戌ノ十二月 不審菴(印)ノ岩井宗麟様」(梶山)



188. 鉄釉瓢形徳利

江戸時代(19世紀前半)

1口

高17.2、口径2.3、胴径10.6、底径9.2

名古屋城内・御深井焼

M1630(祖母懷瓢形徳利 栓付)

轆轤成形による瓢形徳利。暗褐色の緻密であるが、僅かに細かな砂粒を含む胎土であり、腰下部、底部を除き鉄釉が掛けられている。底部は、碁笥底に近い造りで、底部中央に小判形枠内に「祖母懷」印が認められる。「御留土」として民間の使用が禁じられた「祖母懷土」が用いられたもので、尾張藩十二代藩主斉荘が用いた一群の印章に含まれる。底部小判形枠内「祖母懷」印銘。(仲野)



きせとあおいもんつつちやわん
189. 黄瀬戸葵紋筒茶碗

江戸時代(19世紀前半)

1口

高8.7、口径10.0×9.8、底径4.7

瀬戸

M789(黄瀬戸葵紋筒茶碗)

轆轤成形により比較的薄手に仕上げられた筒茶碗。表・裏両面に、二重圈線の中に三つ葉葵が大きく印刻されている。底部を除く全面に掛けられた釉は黄瀬戸風であるが緑班は認められない。底部に篋彫りの刻銘が認められるが、未詳である。(仲野)



はなじゅうもんたわらがたはち
190. 花十字文俵形鉢

かとうしゅんざん
加藤春山

江戸時代(19世紀前半)

1口

高10.1、口径15.2×14.1、底径7.1×6.0

瀬戸か

M1361(俵鉢(洗礼鉢) 瀬戸)

轆轤成形により別途作られたものを接合するなどして制作された俵を半裁した形の鉢。全体に厚手の成形で内面に轆轤目が残る。全体に鉄錆が塗られ暗褐色である。表・裏の中央に花十字文、両側面には蕨手状の文様、その他俵をイメージさせる線文などを、それぞれ掻き落とすことにより、素地の白色系の色が表れて文様となっている。高台内に楕円枠内に「春山」の印が認められる。瀬戸の加藤喜平次(二代)とされるが、未詳である。底部楕円枠内「春山」印銘。(仲野)



ぞうがんとわらがたはち
191. 象嵌俵形鉢

江戸時代(19世紀前半)

1口

高12.2、口径16.0×15.6、底径9.8×7.4

瀬戸か

M1362(三島俵鉢 萩山焼)

轆轤水挽成形により別途作られたものを接合するなどして制作された俵を半裁した形の鉢。厚手に成形された鉄分を含む素地に、篋彫りや菊花、灵芝、棒波などの印型を押し付けるなどしてできた、器面の凹文に白化粧土を埋め込むことにより文様とした象嵌技法である。全面に白濁気味の透明釉が掛けられている。高台部に、施釉の際に生じる指の跡が認められる。成形、施釉、施文等全般にわたり丁寧な仕上がりの器である。コレクションでは萩山焼とされるが、萩山焼は、軟質施釉陶器であるのが一般的であり、根拠が乏しい。(仲野)



おふけゆうきやづき
192. 御深井釉盃

幕末-明治時代(19世紀後半)

1口

高3.8、口径5.8×4.2、底径2.9×2.4

瀬戸か

M1667(御深井焼酒盃)

轆轤水挽成形の後、長楕円形の器形と胴部の文字文が同時に型成形されている。底部を除く全面に掛けられた御深井釉により、圏線に用いられた呉須・鉄絵の一部が流れている。(仲野)



おりべちやわん めい はるの
193. 織部茶碗 銘 春野

ひらさわくろう
平澤九朗

江戸時代(19世紀前半)

1口

高さ8.2、口径10.2×12.8、底径5.8

名古屋もしくは瀬戸

M812(織部茶碗)

轆轤水挽成形の後、二か所を押さえることによって変形させた杓形茶碗。やや深く大振りである。瀬戸赤楽風のオレンジ色が主体で、二か所に緑釉を流し掛けている。側面には、縦線と蕨手文が白化粧土と鬼板を用いて表現されている。高台は、削り出しの輪高台で、高台端部には糸切痕が認められる。見込みに三点目跡。高台脇に「く」字窠彫り銘。箱蓋裏「九朗作／オリヘ菓／茶碗／銘春野／左(花押)」(十二世惺斎宗左)墨書。(仲野)



おりべろくすんかくはち
194. 織部六寸角鉢

ひらさわくろう
平澤九朗

江戸時代(19世紀前半)

1口

高3.3-3.5、幅17.2×16.8

名古屋もしくは瀬戸

M1347(織部六寸の角鉢)

たたらを用い、方形に型成形された角鉢。型成形に伴う布目が目立つ。内面には目跡は無く、底面には大きめの団子状の目跡が四か所認められる。全体を斜めに三分割し、中央帯に文様、両翼には緑釉が掛けられている。見込みに散らされた梅花文は幾何学的な線文で結ばれ、下半には竹垣を思わせる文様が描かれている。外側面には草文が鉄絵付けされており、文様部分には薄く長石釉が掛けられている。底部の中央帯は無釉で、「く」の彫銘が認められる。九朗の作品の共箱には、自作の和歌などが添えられる例が知られている。今昔庵は初代九朗の通称。尾張藩藩士(四百石)で十二代藩主斉荘のお庭焼に関わった。箱蓋表「六寸ノ角鉢」墨書、蓋裏「六寸沓身にて／□□□／千代の春／六十五歳／今昔庵(松黒印)／右露之庵／主人へ焼之／門外不出たるべし」。(仲野)





きせとふたね
195. 黄瀬戸蓋置

まさきそうぶろう
正木惣三郎

江戸時代(19世紀前半)

1 軀

高4.1、幅5.8×3.7

名古屋もしくは瀬戸

M1432(黄瀬戸蓋置 仙人囲碁)

粘土板の上に囲碁を楽しむ老人が手捏ねで制作されている。さらに粘土板はアーチ状に兩人の上を巡らせており、天井部に団子状に円形の穴が三連、両側面には各一か所空けられている。粘土板部分には布目が多く認められ、底面を除く全面に黄瀬戸釉が掛けられている。人物の表情など細かな細工を得意としており、黄瀬戸作品が多く知られる。正木惣三郎(1801-50)は、尾張藩御小納戸役(二百石)を勤めており、十二代藩主斉荘のお庭焼に関わった。底部に「正木」横印銘。(仲野)



きせとしちふくじんたからぶねこうごう
196. 黄瀬戸七福神宝船香合

まさきそうぶろう
正木惣三郎

江戸時代(19世紀前半)

1 合

総高5.4、口径3.8×2.5、幅6.8×3.7、底径2.7×1.4

名古屋もしくは瀬戸

M1516(正木焼七福神舟乗香合)

手捏ねされた七福神宝船香合。帆掛け船の前部に米俵、後部に七福神が乗せられている。七福神の頭部や被り物、俵、船体側面などに黄瀬戸釉が掛けられており、舳先には緑釉が認められる。七福神を乗せた宝船の意匠は正木が好んで制作している。底部に「正木」横印銘。(仲野)





197. ^{きせとそうじはないれ}黄瀬戸双耳花入

^{いちえほうぞう}市江鳳造

江戸時代(19世紀前半)

1口

高20.3、口径4.0、幅8.8、底径4.8

名古屋もしくは瀬戸

M1287(黄瀬戸鯉耳花生)

轆轤水挽成形により、砧形を少し胴長にした形状の双耳花入。頸部上端から肩部にかけて長胴で鱗をほどこした鯉耳が付けられている。底部と胴下部を除く全体に黄瀬戸釉が薄く掛けられている。双耳部分には緑釉が掛けられており、垂れ落ちるように胴部に斑文となっている。底部の高台脇を巡るように「七十翁梨棗造之」の匏彫り銘、胴下部に瓢形印が認められる。市江鳳造(1768-1852)は本名鯉右衛門、尾張藩藩士。平澤九朗に陶技を学んだという。鯉は、出世魚とされる他、自分の本名に因むものとも考えられる。箱蓋表「黄瀬戸花入」、蓋裏「七十翁／梨棗□造之／(瓢形黒印)」墨書。(仲野)



198. ^{おりべおおぎがたはち}織部扇形鉢

江戸時代(19世紀前半)

1口

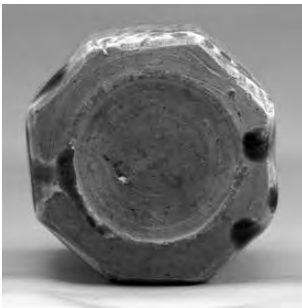
高7.7-7.9、口径26.2-28.9 三脚

瀬戸

M1327(織部扇形鉢)

たたらを使い型打ち成形された扇形鉢。底部には紐環足が三か所認められるが、その配置はややバランスを欠いている。扇の中骨も型で四本表現されており、さらに鉄絵付で強調されている。扇面部分には翼を広げて飛ぶ水禽が描かれ、親骨に当たる内側面には、ゆつたりと波打つ重線文が巡っている。要の部分と扇面の外縁に緑釉が掛けられている。外側面には、斜格子や梅花文などが鉄絵付されている。見込み、底部共に三点目跡が認められる。

箱蓋表「織部阿ふきの鉢」墨書。(仲野)



199. 織部八角火入

江戸時代(19世紀前半)

1口

高8.7、口径7.2×7.2、底径5.2

瀬戸

M1395(織部六角火入れ)

轆轤成形により祖形が作られた後に型成形された八角形の火入。内面に轆轤目がはっきりと残り、見込みには三点目跡が認められる。底部は碁笥底で、高台内に窠彫り銘が認められるが、未詳である。外側面は、四分割され、点描を加えた斜格子・緑釉、山形文と梅花文・緑釉の順で繰り返されている。(仲野)



200. 黄瀬戸茶碗

おおししゅうじ
大橋秋二

江戸時代(19世紀前半)

1口

高7.3、口径9.9、底径5.1

瀬戸もしくは津島

M548(黄瀬戸筒茶碗)

穏やかな杉形で口縁端部が僅かに開く碗。高台脇が面取りされており、そこから窠先を用い口縁端部に向けて縦に、ほぼ等間隔で十六条の沈線が繰り返し施されている。底部を除く全面に黄瀬戸釉が掛けられており、腰部に弱い緑斑が認められる。底部に「秋二造」窠彫銘。『陶々斎秋二』(陶々斎秋二出版実行委員会、1997年〈玄孫浅野不二子〉)に類例所収。(仲野)



201. 青磁建水

せいじけんすい
おおはししゅうじ
大橋秋二

江戸時代(19世紀前半)

1口

高10.3、口径13.3、最大径14.6、底径11.5

瀬戸もしくは津島

M1191(青磁写建水水指)

肩部でくびれ、胴下部へむかい穏やかに広がる形状の建水。口縁端部は面取されており、外面底部を除く全面に、やや灰白気味の青磁釉が掛けられている。口縁下部には、印刻による雷文が巡っている。箱書から、同作品が五客作られたことが分かる。底部に「秋二造」彫銘。

共箱「臺司 青磁 御建水 二ノ五 陶々斎 秋二収造」墨書、「秋二生」縦長方形黒印。(仲野)



202. 織部菊文手付角鉢

おりべきくもんてつきかくはち
おおはししゅうじ
大橋秋二

江戸時代(19世紀前半)

1口

高13.5、口径20.6×20.0 三脚

瀬戸もしくは津島

M1589(織部手付菊角鉢)

たたらをうい型打ち成形された方形鉢に把手が伴う。対角線に沿って、数条の沈線が走る幅の広いアーチ状の把手が付けられており、身との接合部には瓢形の透かしが入れられている。把手の付かない両隅僅は、僅かに入隅となっている。見込み及び側面に余白を残し菊文が描かれている。底部及び菊文を除く全面に濃い緑釉が掛けられている。底部には紐環足の三脚が認められる。底部「入道秋二製」釘彫銘。(仲野)





203. 織部扇形鉢

おほししゅうじ
大橋秋二

江戸時代(19世紀前半)

1口

高5.5、口径26.3×22.2 三脚

瀬戸もしくは津島

M1338(扇面形織部鉢)

たたらを用いて型打ち成形された扇形鉢。半面を赤味の有る褐色、半面に緑釉を掛け、鳴海織部の雰囲気を出している。中骨・扇面などによる区画は無く、見込みに七宝文を散らし、外側面には点描を加えた市松文などが描かれている。内面を中心に布目が目立つが、文様を含め完成度は高い。底部は無釉で紐環足が三か所認められる。底部に「秋二造之」鉄絵付銘。(仲野)



204. 織部扇面形鉢

おほししゅうじ
大橋秋二

江戸時代(19世紀前半)

1口

口径27.3×22.6 三脚

瀬戸もしくは津島

M1703(養老焼織部扇面込)

たたらを用い型打ち成形された扇形鉢。中骨部分は透かし彫りで四本表現されている。要・中骨・扇面の一部に白濁気味の緑釉が掛けられている。扇面部分の緑釉は、斜めに掛けられており、鉄絵付けされた水車に流れ落ちるようにも見える。扇面部分に梅鉢文を散らしたものが二客、菱文を散らしたものが三客で五客の組み物となっている。底部に紐環足が三か所認められるが、成形全般に粗さが認められる。底部に三角形枠内に「秋二」印刻銘。(仲野)



205. 赤楽茶碗 銘 山の錦

あからくちやわん
めい やま にしき
不俊斎松尾宗五

江戸時代(19世紀前半)

1口

口径9.8、胴径10.5、高台径3.6

名古屋

M779(赤茶碗 銘 山の錦)

松尾流5代家元不俊斎(1792-1830)手造りの赤楽茶碗。白粒の混じった肌理の細かい素地をもち、内に抱え込んだ薄作りの丸碗。表面はなでられるが、内面の篋目は強い。見込みは広く、釉薬は土見せて掛かり、発色は山吹色。暗黒色の火替わりが認められる。手取りは軽い。高台は低く、畳付の幅は広く、高台脇は水平に削られている。箱蓋裏に「不俊作茶碗／銘山の錦／(中略)／仰止斎 宗(花押)」と、松尾宗古(仰止斎・1820-1856)の花押が据えられる。焼成は名古屋と思われるが、窯は不明。製作年は不俊斎の家元時代とした。(岡)

安南写について

コレクションにおいて安南とされてきた一連の作品の内、矢島律子氏の調査(『愛知県美術館 研究紀要 第28号』)により、それらの多くは「17世紀の初めに、日本の茶人が注文した一連のベトナム青花を念頭にその後日本国内で生産された作と考えられる」と結論付けられた。青花思字文盤(M1319)は、尾張藩御庭焼である楽々園焼にその模作が存在することを踏まえ、検討資料としてここに再掲載する。瀬戸を中心に再調査をしたが、現時点においては、産地、制作年代ともに未詳である。全体に、磁化の不十分な有色素地に人物、草花、船、文字などが染付されている。



206. 染付魚文碗

江戸時代(18世紀-19世紀)

1口

高9.1、口径13.2、底径8.4

産地不詳

M549(安南遊漁文茶碗)

魚文の染付された大振りの碗。高い高台は三か所アーチ状に大きく切り取られている。胴部には悠々と泳ぐ魚が巡り、見込みには圏線の中に渦巻くように双魚が描かれている。高台端部を除き全面施釉されている。(仲野)



207. 染付文字文碗

江戸時代(18世紀-19世紀)

1口

高8.3、口径11.5×12.0、底径7.1×7.4

産地不詳

M550(安南茶碗 銘 上楽和下睦)

側面に文字の書かれた碗。高い高台に筒状の体部上端が僅かに開く碗形。文字の判読は難しいが、側面に「上楽和下睦」見込に「賓(別字)」と考えられる。高台内には錆釉が施されているが、塗りむらが目立つ。見込みには輪壳が認められる。「賓」の文字、輪壳、高い高台、高台内の錆釉などは安南写しの約束事とされる。(仲野)

蓋覆紙墨書「安南／上楽和下睦／見込に賓の字／あり」



208. 染付船文碗

江戸時代(18世紀-19世紀)

1口

高9.5、口径12.0、底径6.9

産地不詳

M551(安南茶碗 銘 入船)

高台が高く、張った腰部から上部へ僅かに開く筒碗。胴部の四方向に素朴な筆致で船に乗る人物文や草文などが描かれている。高台端部及び内面は、丁寧に錆釉が掛けられている。(仲野)

箱蓋表墨書「安南茶盃／銘／入船」

箱蓋裏墨書「入船や／ぶくぶく福を／泡立て、／九十七才／守一記」

風呂敷墨書「安南茶盃／守一／銘／入船」



209. 染付人物文碗

江戸時代(18世紀-19世紀)

1口

高8.4、口径12.8、底径6.8

産地不詳

M568(安南茶碗 天下安泰花鳥童子図)

口縁部に向かって開く碗。「天下」と「安楽」がそれぞれ人物文に添えるように書かれている。外面底部、高台、腰部、口縁部に圈線が認められる。(仲野)



210. 染付花鳥文壺

江戸時代(18世紀-19世紀)

1口

高9.5、口径6.5、胴径8.0、底径6.1

産地不詳

M2244(安南染付花鳥文落葉小壺)

ハの字形に開く高台に長楕円形の胴部に真っすぐ立ち上がる口頸部が続く小形の壺。胴部には草花文、頸部には圈線に区切られた帯状の文様が染付されている。底部は無釉で窯割れが生じている。(仲野)

近世・関東以北



211. 赤楽注連縄に海老絵茶碗 銘 点初

川上 不白

江戸時代 宝暦元頃-文化4(1751頃-1807)年

1口

高8.8、胴径12.6、高台径5.5

江戸

M805(赤茶碗 銘 点初)

江戸千家初代家元川上不白(1719-1807)手造りの赤楽茶碗。素地は粗い赤土で、内湾した半筒形の茶碗。黄土を厚く塗り、高台脇まで釉を掛け、鮮やかな朱色に焼きあがる。白泥で片面に注連縄文を、対面に黒釉も加えて2匹の海老を描いた年頭の祝儀茶碗である。外側面に鋭角的な篋目を入れ、内側面は左回転の螺旋状に削り、見込みには茶溜を作る。高台は土見せで低く、高台脇に不白の花押が彫り込まれている。共箱で、蓋裏に「作／赤茶盃／点初／不白(花押)」とあり、宝暦元年(1751)頃に「不白」号を名乗って以後の製作と考えた。焼成は江戸と思われるが、窯は不明。(岡)



212. 都鳥香合^{みやこどりこうごう}

江戸時代(19世紀)

1合

高3.6、最大口径6.0、底径3.9

隅田川

M1494(隅田川焼香合 小鳥のつまみ)

落し蓋を伴う円形の香合。隅田川焼の香合には、水鳥形の例が多く知られるが、本作では蓋の鈕に鳥があらわれている。蓋は平坦で淡い緑釉が掛けられており、数条の沈線で川面の水の流れを表わし、その中央に水鳥(都鳥)浮かぶ情景が表現されている。外側面にも緑釉が掛けられており、内面には透明釉が掛けられている。隅田川の中州の土を用いたとされる軟質施釉陶器である。身部内面に粘土塊を貼り付け、その上に円形枠内「スミタ川」の印銘が認められる。重さ60g。(仲野泰裕「隅田川焼の系譜」『江戸の花屋敷』(財)東京都公園協会、2008年)(仲野)



213. 鉄絵走馬図茶碗^{てつえそうまづちやわん}

江戸時代(19世紀前半)

1口

高6.7、口径13.7-14.1、底径3.8

相馬駒

M799(相馬茶碗)

轆轤水挽により逆三角形状に成形された碗。やや大きめの砂粒を含む素地が駒焼の特徴であり、器面は荒い肌合いである。腰部に強い篋削りが波打っている。削り出し高台。胴部及び見込みに、走馬(右駒・左向き)が鉄絵付されている。やや不透性のある黄褐色釉が掛けられている。腰部に長角枠に「相馬」印銘。(仲野)

相馬駒焼(福島県相馬市中村字田町)



214. 童子鯛持^{どうじたいもち}

幕末(19世紀)

1軀

高9.3、幅7.3、奥行4.2

相良人形

M2318(相良人形 童子鯛持)

相良人形は、寛政年間(1780-1801)に、米沢藩の相良清左衛門が創始した。前後二枚の型により成形され、乾燥、焼成後、胡粉を用いて白く塗り、表情・衣服などを彩色したもので、三角目が相良の特徴とされる。童子が鯛を抱きかかえる姿であるが、全体に汚れが多く、褐色気味に変色しており、制作時の色調とは異なる。縁起ものが多く、全体に丸味を帯びた造形と穏やかな表情に心和むものが有る。底部に「の」墨書。(仲野)